

心に深く鏡を打込みまして、

「母を呼べ！」

と命じて、松之丞を去らしめました。

その胸中は疾察してゐられる内室は一室に入るや、果せるかな別離の申渡しでござ  
います、悲しさは素よりであるけれど、良人が離別の意味は不言の間に能く解つてお  
ますので、内室は托された三人の子供を伴ふて、永き別れを惜みつゝ但馬の豊岡へと  
旅立ちます、内藏助とて哀別離苦の情は腸も沸き返るやうで、振り返りく立ち  
行く妻と子の姿を見送り、暗涙に咽び、

「酒だ、酒だ！誰ぞある、酒持て！」

### 四六 お留守が大切だ

冷光院殿一周忌の法會は、其の墳塋の地たる高輪泉岳寺は申すまでもなく、播州赤  
穂の縁故ある寺院、京都の瑞光院にても何れも丁重に執行はれました、當時は内藏助  
の嘆願哀訴に公儀の御目附衆も同情を表され、荒木十左衛門の如きは態々特使を立て  
て、公邊の首尾をさへ漏らし來たとの取沙汰も、バツト致しました事とて、御家再興  
は假令小祿たりとも仰付けさせられやうと見越した、日和見の連中まで我れもくと參  
拜に出で、主家再興の曉天には晴天忠義顔して感賞に預らんものと、我が身可愛さに  
ぞろ／＼寺院へ詣でます程でしたから、追々に手蔓を求めて同盟に加はらんと熱心  
を装ふ者もあり、口には内藏助の濫行を批判し、原惣右衛門、大高源吾等の急進派の勇  
ましき態度に加擔いたし、一日も早く江戸表へ下向して亡君の御辭憤を晴させ奉ら  
んなど言て居た者が、其の頃は東西合して一百二十五人もございました。  
然るに一周忌も過ぎて公儀からは大學様の閉門も許りません、御家再興の御沙汰は



猶更にごさいませんので、臂を張り肩を聳かして如何にも末頼しき連中と見えたる人々も、漸う疑心の心に誘はれて一死君恩に報うなど云ふ口吻も出さず、總大将の内蔵助が彼の放埒では到底も復讐の素懐を遂げること夢にも適ふまじと、己れの劣情に引き比べて生命あつての物種、死んで花咲き實の生る例しなすと、腰拔の本性をチラチラと現しかけました、それに此の度内蔵助が妻子を離別して遠く但馬へ送り返し、昨日に勝る濫行はますく激しくなつて、朝でも晝でも別ち無き酒浸り、偶々山科へ歸るときは誰に遠慮もなく、藝子仲居や幫間など引き連れ来て、我が家を揚屋の如く狂ひ騒ぐ浪藉に後指さぬ人として無く、

「ア、お氣の毒や、赤穂の御家老とも言れた人で、お家没落の時は天晴の器量人よ、殿様の恨みを復すは彼のお人と、世間で嘲したも買被りぢや、奥方の意見を傾いと云つてお國へ追出し、如何に頭の仰へ人がないとして彼の態度は何うぢや、内蔵助で

は無うて放蕩の助ぢや……」

と取りぐの悪評でございました。

世間の評判が餘りに激しうございますので、松之丞は窃に心を痛め、父は何時もの如く島原の遊郭に果敢なき蝶の夢の狂ふか、將た伏見の里に他愛なく色を漁るか、此處五七日は山科の道を忘れて蔭覗きもしませんから、夜を冒して小野寺十内の隠れ家を探ね、

「卒爾ながら大石松之丞、御意得たうおぢやりまする。」

と申し込みますれば、十内は内蔵助の息子が此の夜中に來るは如何なる要事であらう、恐らく大夫よりの密使ならんと早速出迎ひ、書齋へ請じまして、

「夜中態々の御入來御苦勞に存する、他に聞くものもおぢやらぬ、御遠慮無う御要談伺うでおぢやらう。」



「夜陰に推参いたして恐れ入つておぢやりますが、私、未熟にして父の胸中も推測りかねますので、御懇意に甘へ其許様の御意見を伺ひ度……尤も父が内を外なる濫行、あれは本心にあるまじくとは承知いたしますれど、世間の取沙汰餘りに残念なやうにも存すれば、當初の一念に變りはおぢやり申すまじきや、此の邊の所御隠しなくお示し下し置かれませうなら、この松之丞も思案の臍を固めまする覺悟におぢやります。」

と眞心に現れ、決心の程頼しく見えましたので、十内は深くも感じ入り、

「何かと存すれば、大夫殿の御濫行に就てのお尋ね、随分場敷を踏でまるつた拙者どもでも、御本心を知らずば誠に御濫行とより存じ申されぬぢや、御身が御痛心も然ることながら、十内御傍にある上は、大夫の思召しに兎の毛ほども變りがあれば、此の老人が悪所通ひのお供は致さん、お解りになりましたかな。」

「如何にも解りました、其許様の御一言で安堵いたしておぢやりまする。」  
 「この上は母上も、在さぬ山科のお邸、お留守は御身の大任でおぢやる、御油斷召さるな。」

「畏まつておぢやる、いざ御暇申す。」  
 と松之丞はまたも其の姿を闇に隠しました。

此のころ父の胸底を測りかねて悶へて居ました松之丞も、小野寺十内を訪ねて其の濫行の本心にあらざるは、自分の考へ通りであつたので、ますく留守を嚴重に守つて居る處へ、流石の内藏助も十日餘りで、ぶらりと歸宅致しましたが、相變らず熟柿のやうに酒氣芬々、漫歩踰躑としてよろけつゝ座敷に入ると、

「水だ、水だ、水を持て！」

ところりと横に成りました、松之丞は自ら清水を水呑に汲みて持つて來るをデロリと



横目に見て、

「留守中、何事もおぢやらぬか……」

「はい、變つたこともおぢやりませぬが、進藤氏が一度と瑞光院の海首座が一回お見えになりました。」

「ハテ、進藤氏と瑞光院が越された、何も言ひ置きはおぢやらぬかの？」

「はい、何事も仰せ置きはおぢやりませぬで……」

「可し、可し！」

と内藏助は其の儘何事も申さず、臂を枕に肩の聲が雷の如く發しました、松之丞は心得て枕を持ち来て、

「父上、お枕を……」

と頭の下へ枕を當がひました、内藏助は夢心地のやうに之れをしましたので、松之丞

は靜かに座敷を出やうとする時、

「松之丞、待て！」

「はい、何か御用で……」

「お、其方も最早成童と相成つた、殊に此の度の大事に此の父と共に行動を同じく致すに、前髪があつては何となう小供じみるぢや、今日は幸ひ日柄も好し、元服いたして男一人前の姿に成つたが宜からう。」

「はい、難有うおぢやりまする。」

「萬事は小野寺氏にお願ひ申してあるに依て、最う程なく見えるでおぢやらう、其方も準備いたして置け！」

「はい！」

と松之丞は下僕に命じて湯を沸させなどして居るうち、十内も遣つてまゐりまして、



浪々の身であるからとて略式に元服の式を挙げ、松之丞の名も今日より大石主税良金と名乗り、主客の間に目出度くとの挨拶も済みますると、稍や夕暮近くなりました。うき様の御邸はこゝぢやくと云ふ聲がして、藝子仲居や替間ども十餘名ドカくと入つて来る、續いて親くいたす誰彼、

「松之丞殿、お目出度おぢやる。」  
と口々に祝ふて参り、山科の邸には長夜の祝宴を張つて賑かでございました。

### 四七 二文字屋のお軽

此の頃まで同志の中で内藏助とは親類關係のございます、小山源吾右衛門と進藤源四郎は、濫行のいよく募るに眉を顰め、世間の風聞に耳を傾けまして、或る日窃に寄合つて相談いたし、

「進藤氏、貴殿は何と思召すやら存せぬが、大夫殿の放埒、如何に敵に油断をさせる爲めかは知らねど、餘りと云へば亂暴狼藉ではおぢやるまいか……」

「小山氏の御意の如く、誠に苦々しき次第で、世の取沙汰では妻子を離別したのも、自分の道樂を勝手にする爲めの仕業と申し居ることを耳にいたしたが、人の口に戸が閉てられぬと云ふ事もおぢやれば、左様のことは齒牙に掛けずと置き申しても、此頃の白痴さには同志の面々も憤り、とても復讐の念などは無いと見縊り、寄りより彼れを除物にして事を擧げんと圖る向きもあるやに聞き申すぢや。」

「如何にもそれぢや、妻子を放蕩の邪魔にして追つ拂ひ、御家再興を口實に約束を無にするは何たる白痴でおぢやらうぞ。」

「さア、其處でおぢやるがの、御家再興の事は何うあらうか、拙者共も今日となつて疑はしう存するツて、同志の中にも斯うなつては公儀の御掟を破り、猥に敵の邸に



討入るなどはますく大學様に御迷惑を相掛け、主家へ忠ならんとして却つて不忠に成らうと考へる向もあるぢや。

「成程御意の如く、主家へ此の上の御難儀を及ぼすは臣子の忍び難いところでおぢやるが、夫れは臨機應變の處置を取れば遅きことも有るまいけれども、大夫殿の今日此頃の濫行は、何とか致さねば我れ親類の縁に繋がる者まで、同志からは恨みを受けねば成り申さん、世間からは大夫殿と共に誹謗を被ることに成るぢや、何とか好き工夫もおぢやるまいか……」

「切めては遊廓通ひだけでも思ひ止めさせる手段を致さねば成るまい、貴殿は何う思ふか存せねど、是れといふも一つは空閑の寂しさもおぢやらう、一層側妾でも置かしては如何なものかと拙者は存するが何うあらうか。」

と已れ等の心に比べて美人を侑めて、内藏助の遊廓通ひを止めやうと圖りましたが、

一應は瑞光院にも相談した方が宜しからうと、兩人は打揃ふて瑞光院に海首座を訪ふた。

「これはく、御兩所お揃ひでお珍しい、さア此方へお通り下さい。」

と海首座は座を設けて兩人を請じます、進藤源四郎は先づ口を開き、

「御院主、今日は俗用につき些と變な御相談に推参いたしておぢやる。」

「はア、何事でおぢやりますぞ、浮世を捨てた愚納に御相談とは……」

と海首座は數珠を爪繰り居ります。

「人を救ふは其許様の御職分でおぢやるでう。」

と小山源五右衛門も申し出で、内藏助に側妾を侑め遊廓通ひを止めさせやうと相談を持ち出しますと、海首座も同意を表しましたから、源五右衛門は

「さて側妾は、誰れ彼れと申さんより、一條通り町あたりに住む二文字屋次郎左衛門



の女軽が宜しからうと存するが、幸ひ二文字屋は御院主とは御昵懇のこと、一骨折つて戴きたうおぢやる。」

「はて、彼の輕女でおぢやるか、京洛に穩れなき美人の評判ある女ぢや、世捨人の愚衲ですら美しい娘と存じ居つた、あれならば大夫殿の御意にも適ふでおぢやらう。」と此の坊さん中々粹を利かして橋渡しを受合ましたから、兩人は歡びてこの事を早速内藏助に通じました。

内藏助は胸中二人の心を推測つて笑止さを忍び、此の節世間の噂には妻子を追つたは放埒の邪魔拂ひと隠口利くとやら、そこで今また京中で評判の高い絶世の美人二文字屋のお軽を妾としたら、それ見たことか、妻子を追ひ出したは若い美人を後釜へ据ゑる下心であつたよと、ますく悪評は募るであらう、吉良上杉の隠密もこれを聞けば、妾まで置く位だから復讐の念なしと安心するならん、是れは好機會であると内心

大いに歡びましたが、然り氣なき如く頭を搔き、

「御兩所の御深切なる肝煎、内藏助執着に存じ申す、然らば折角の御心入れ御辭退申さず御言葉に従ふでおぢやる。」

と莞爾歡びまして早速お軽を山科に迎へ取り、寵愛一通りでございませぬ。」

お軽はまだ年も若い上、遊藝は何一つ出来ぬもなく、茶の手前、花の挿方、香の道に至るまで天晴の手腕もあり、就中氣立の優しい柔順な女でございませぬから、内藏助も又なきものと愛し、何事もお軽くと掌の中の玉のやうに致して居りますので、同志の若殿輩は是れを見て窃かに氣を悪くし、

「怪しからん次第でおぢやる。」

と内々スコ焼にやきて敦固もございませぬれば、また其の艶麗花の如き羞明きを見て、「ア、絶世の美人ぢや、一日たりとも大夫にあやかり度い……」



と羨むもある程でございました。

こんな絶世の美人を山科に入れて寵愛して居ますので、是れならば少しは内を外なる故埒も止むであらうと、源吾右衛門や源四郎の徒は思つて居りましたが、只だ内蔵助の詭計を幫ける材料と成つたばかりで、更に何の効験もなく、戀の深草に積む雪のそれなら無くて九十九夜さも愚かなこと、木幡の里の夕闇に一寸先も見えぬ通ひ路に、たゞ夢のそらなる伏見の里は撞木町、笹屋の暖簾おし分けて色の淵瀬を渡る浮橋の許に三日に揚げぬ入り浸り、入相の鐘に萬燈の影さえて、戀の仇波寄せては返す張りと意地との枕の船底、神代からなる女日照の島原で、浮れくるわの客衆をはかる、榊の數目も一榊さて二榊と三榊屋の全盛太夫夕霧に、氣も魂も現なに通ひ詰める内蔵助の底の心もしらま弓、弦も何時しか切れ果て、逆さに反つた光景に呆れぬ者としてはなく、口善悪なき京童も、

あかほでわるうてあはう浪人、おほいし軽くて張拔石とさへ誦ひ囃しました。

斯うなると如何に猜疑心の深いものでも、是れはくくと己が勤めの偵察も眞面目には出来ぬもの、振ひ残された敵方の細作も大抵は往生する。

「ア、内蔵助は大白痴だ、正體たしかに見届けた、最うこの上は氣狂染みた眞似する狂人の相手になるは無駄！」

と一人去り二人去つて、此の年秋には大略江戸へ引揚げて了ひましたので、内蔵助は心に我が事成れりと復讐の劃策を胸三寸に疊み、飲む酒も酔心地好く溫柔郷に結ぶ夢も圓かでございましたらう。

四八 闇雲驟雨を齎す



暗雲驟雨を齎らす

さて江戸表の模様は何うであつたかと申しますと、内藏助の濫行は日に追ふて募り、吉良家の細作、上杉家の隠密も其の白痴さに呆れて追々引揚げて来たといふ風聞もありますし、急進派の躍起連からも不平の消息にも接しますので、最早君國の滅亡などは忘れ果て、只管一身の快樂にのみ耽り、正體も無き有様であると聞きましては、何れも不安心で堪りません、躍起となつて先づ吉田忠左衛門の宿を襲ひ、肩臂張つて騒ぐものすら出来てまゐる始末、最早大夫の口車に乗せられて何時までもく便便と待つては居られぬ、因循御家再興に假托て復讐を延引すれば、延引するだけ敵の用心も嚴重になる、又この頃米澤下りの準備もあるやうに取沙汰もしましたので、江戸の急進派で宛然首領のごとく同志の相談相手でございます堀部安兵衛は、上方の急進派の親玉と目指れて居ります原惣右衛門に打合せ、最早猶豫する場合でない、因循を構へて一舉に躊躇する面々は語るに足らず、一黨二十餘人もあれば直に警の邸に討て

入らんと、安兵衛は躍起となつて同志の糾合に奔走してゐる、養父彌兵衛の如きは常に使ひ馴れた手槍を粒々と扱きまして、年こそ老いたれこの槍一本あれば壯者に劣るべきやは、いざ討入りの其の時は一番槍をつけて、花々しく餘命を君に捧げんと安兵衛を勵ましますから、ますく討入りの準備に油断なく、同志の面々と吉良家の動靜を探つて居りましたが、其の辛苦効を奏し敵情の偵察も出来た。  
さア是れで可し、以上は討入りの人數を纏めさへすれば決行を躊躇するに及ばぬと、一書を認めて關西の急進派、原惣右衛門、潮田又之丞、中村勘六、大高源吾、武林唯七の五人に寄せましたは、元祿十五年六月十二日でございます。其の書中には、兼ては二十人も無之候はでは、本望難達と申進じたる事に候も、退て能々考申候處、二十無之候得共、存切たる眞實之者十人も有之候はゞ、心安く本望は相達すべくと存候。

暗雲驟雨を齎らす



と決意を示し、尙ほまた、

近頃江戸侍了簡多く、畢竟腰の不立故と可申敷、絶言語候、十人存切たる者共  
有之候は、中々再往如、此及御相談申間敷ものを口惜存候。

と憤慨した書面を出しましたが、安兵衛は手紙ばかりでは時機を誤るものと決心いたし、同月十六日米澤町の借宅を片付まして、芝に卜居して同志の懸引きを總轄いたし居る忠左衛門の處へまゐり、

「拙者は至急に打合せすることもおぢやれば、是れより上京いたします。」

と斷つて十八日に江戸を發し、東海道を急いで京に着きましたは、其の月の二十九日  
でございましたが、直ぐに大高源吾の宿所にまゐると、源吾も安兵衛からの手紙を見  
て勇氣勃々として、直ぐにも下向仕度と思つてゐる處ですから、

「やア、是れは堀部氏、能くぞお登り下された、お手紙を拜見して直ぐにも参りたう

存じ居つたところでおぢやる。」

「いや拙者も手紙を差出したが、あれにては何となく心元なく存じたに依て、親しく  
御相談を致さうと存じてな……」

「それは遙々の處を御苦勞に存する、然らばお疲れもおぢやらうが、是れより直様大  
阪に参り、原氏と篤と相談いたして決行の運びに着手いたすでおぢやらう。」

「そは望むところ、いま御同道をいたすでおぢやらう。」  
と安兵衛と源吾は直ぐに支度を整へまして、大阪表へと發足いたし、原惣右衛門の宅  
に着きますと、五人は額を鳩め協議を始める、惣右衛門は

「我れ等の一派が分離して事を擧げんは、同志の人々に對して氣の毒にも、私情に於  
いては忍びざる所でおぢやるが、此の場合是非に及ばぬ次第でらう。」

「御尤もの御意でおぢやるが、徒らに大切ばかりを取つて、何時復讐をされやうか解



らぬを、便々と待ち居るも本意でおぢやらず、殊に大夫殿の今日此頃の濫行、江戸表に於いて聞きしに勝る體裁、假令本心にあらぬまでが容易に決行の意はあるまじ、最早我れくにて一決するより外道はおぢやるまいツて……」

と安兵衛の語氣は翻へすべからざる決心を示して居ります、源吾も素より躍起組の急進派でございますから、何條安兵衛の意見に衝突致さう、

「御兩所の仰せらるゝ所、拙者は一々御尤もと存する、左様いたせば大夫の常々言る君國の祀を存せんその誠意をも傷け申さず、また亡君の御鬱憤も晴させ申す事と成るべく、旁々以て武士の面目を全うせんは、最早事此處に出るより外策の施すべきやうもおぢやるまい、拙者は早速武林、中村の兩氏に知らせ申すでおぢやる、原氏も潮田氏その他へお知らせを願ひ度もので、のう堀部氏左様いたさうではおぢやらぬか。」

「それは結構、左様相成れば態々上京いたした甲斐もあり満足に存じ申すぢや。」と安兵衛も喜びますと、惣右衛門は

「段々江戸の衆の御盡力で敵方の模様も解り、殊に此度堀部氏の上京にて拙者も意を決して、我れく一派にて決行に極め申さう、併し再應の御手紙にて略ぼ様子も承はつて居るが、二十餘人も同志があれば素志を遂げ申すに遺憾はおぢやるまいか。」

「御意の通り、何二十餘人の同志は無くとも、我れ等十餘人が一致して事を擧ぐる時は、袋の鼠を探るに齊しい彼の白髪首を得るに難き事のおぢやらうや、安兵衛大言を吐き壯語を銜ひて、各方を誤り、長の年月苦心を忍び申した一念を水泡に了るが如き不覺はお勧め申さんぢや。」

「堀部氏の斯く仰せらるゝ上は、拙者は關西の同志と結び、一刻も早く下向して事を



擧ぐる所存でおちやる。」

と源吾は、直ぐにも飛出さん素振でございます。惣右衛門も猶豫なく、

「さらば、拙者も共に事を擧ぐる同志を撰び申さんが、大高氏のお目鑑にては……」

「左様、差詰老功の間瀬久太夫殿、その子息孫九郎殿、拙者の弟小野寺幸右衛門、甥

岡野金右衛門、および拙者五人は動き申さぬぢや。」

「江戸にても奥田孫太夫、養父の彌兵衛を始めとして凡そ七八名はおちやる。」

と安兵衛は云ひまする、原惣右衛門、首肯いて、

「某とても七八名はおちやらう、東西の同志を集むれば三十人足らずの人数と成り申

さうぢやが、當月も最早盃蘭盆も間際でおちやれば、七月二十六日までに當地を發

足する事に致しては如何でおちやらう。」

「その邊の事、委細貴殿のお指圖にお任せ申す、宜しくお指圖頼み入る。」

と安兵衛も惣右衛門に一任いたしました。

### 四九 形勢忽ち一變す

敵を欺く苦肉の計略は圖に當つて、一味同心金鐵の如き士すら、その心情を怪しみ、君國の祀を存せんとする誠意から、御家再興を専念一意心掛けて心にも無き優柔不斷、幾度か發せんとする危機に迫るを、漸く抑へて今日まで過ぎました、内藏助の苦心慘澹たる胸の中は熱湯を飲み、背に鉛を鑄込まるゝ思ひがありましたらう、然れど去年四月の赤穂開城も無事に難關を脱け、また今年の二月山科會議の激昂も漸う抑へて、主家再興の妨げを防ぎました、處が此の度の決心は中々に防ぎ切れず、急進派はいよゝ同志と分離して事を擧げんとする模様、早くも溫和派の面々より内藏助へ注進がある、其の參謀の小野寺十内の耳にも入る、別て十内の養子幸右衛門も兄大高源



吾に一味して急進派の一擧に組すれば、其の溫和派の中からも血氣の壯者輩は、髀肉の歎に堪へない處に、快擧の風聞を耳にしましては黙して居られません、大阪に近き者は原惣右衛門の許へ馳せ付けるもあり、又潮田又之丞の住居に押寄せせるもあつて、小野寺十内が如何に内藏助の命を受けて鎮壓せんとしましても、京都には大高源吾といふ躍起の頭領がある、尙ほ武林唯七といふ急進派の急先鋒がございますので、此の度こそ破裂であらう、何うかして喰止め、輕擧事を誤る如きの出来ぬやうと、一層の苦心を致し、十内は深夜密に山科に赴き、内藏助と膝突合せて防禦の工夫に思慮を回らして居りました。

然るに急進派の準備は着々と運び、七月も早く二十二日となり、潮田又之丞、大高源吾、武林唯七等は二十六日には京都を脱け出で、江戸へ下向する支度中との情報があつたので、小野寺十内は内藏助の邸に馳せ付け、まだ挨拶もせぬうち、主税はバラ

バラと縁傳に駆けまゐる、内藏助は屹度なつて、

「憫だしい、何事でおぢやる。」

「只今、江戸表吉田氏よりのお早駕におぢやりまする。」

「吉田氏より早駕が参つた！直ぐこれへ通せ！」

と内藏助は何時になく面色も動き、憂の雲は眉の間に棚引きて落着ぬ擧動でございませ、十内とても未だ何事とも知らねど、江戸表の異變とすれば、大學様の御一身に關する大事と、是れも黙して控へました。

早打は首に掛けた一通の手紙を差し出した儘、物をも云すバツタリ付れまする。

「ソレ介抱して取らせ。」

と内藏助は指圖しつゝ、書狀を取るも遅しと開封すれば、大學の左遷でございませるか、流石に大度の器量人も暗涙に咽び、悲憤の眼さし鋭く、碯と東方を睨み、



「十内、之れ見られい。」

と手紙を差出しましたので、手に取つて見ると、御舍弟大學様は去年の三月凶變あつてより閉門のまゝ、木挽町のお邸に悵せき月日を送り、謹慎を旨として家の再興を念じられたも今は仇となり、七月十八日淺野の自家なる松平安藝守綱長へ、

「大學事、亡内匠頭存命中世嗣に相成居候者に有之、内匠頭公儀に對し奉り、不届相働き切腹仰付られ候上は、其儘擱れ難く、今般閉門差免され、知行召上候に付、安藝守本國へ引取申すべし。」

といふ文意の御沙汰でござりました、さうして此の早打駕は、十八日に此の御沙汰のあつたを聞くと忠左衛門が直ぐ内藏助へ知らせのため、晝夜東海道を駆け通して五日目に山科に到着したのでございます。

内藏助か腸は實に寸断々々と千切らるゝやうで、其の落膽は期したる事とは言ひ

ながら、又今更の如く口惜く暫く瞑目してゐました、十内とても思ひば同じく頓に言葉も出ざる程でしたが、

「大夫、斯うなつては最う如何んともすること難く、昨春以來の御苦心、御残念は嘸ぞかしと推察いたしまする。」

「御同前に、最早何をか待たんやでおぢやるのう。」

と久しく胸中に往來してゐました、御家再興の希望と復讐の二途は、乍ち一途に歸して奮然たる勇氣は骨肉の間に躍動することに成りました。

又分離しても面目を全ふせんと、既に京を退く用意整ふた急進派の同志は、此の事を聞くと齊しく驚き悲しみ、二十六日を限り下向の約束は暫く延期と決した、同じく二十五日江戸の同志奥田孫太夫より差立てた急使は安兵衛の許へ届いたので、一同の胸底に龍躍り虎猛るの概ありとも申すべきか、原惣右衛門は急進派の新同盟に向ひま



して、

「大學様の自家へお預けとなる以上は、大夫の第一の主張は畫餅に屬し、最早自家再興の望みは當分覺束なき事でおぢやる、事此處に至つては大夫の心機も必ず一轉し申すべく、残るは快舉の一策あるばかりでおぢやる、此の期に及び尙ほ大夫に秘し、一黨を分離して我れくばかり事を舉ぐるは忠實とは申されん、君國を思ふ念は誰も同じでおぢやらう、されば一般に打明けて同志一致の運動を採るこそ宜しかるまじきや。」

と言ひ出しますると、誰とて己れ一人忠義立てして名譽を得やうと云ふ卑劣の根性骨を有つ者はありません。

「一致事を舉げ得られるならば、此の上もなき本望でおぢやる。」  
と挨拶しましたので、原惣右衛門と堀部安兵衛は、直ぐに山科へ駆け付け、急進派の

計畫を打明けて共に復讐の快舉を急がんと迫りました。

内藏助は兩人の意見を沈黙して聽いてゐましたが、

「此の上は、何とか考へずば成るまいと存じ居つた處でおぢやる。」

と當らず觸らずの挨拶であるに、氣早の安兵衛は更に猶豫もなく、

「大夫に置かせられても、最早御決心のある事と存じ申す、拙者どもが彼是と申し上げずとも儀ではおぢやれど、此の場合是非同志の大寄合をお開き下され、今後の方針を極め度うおぢやるツて……」

「いや、御尤もの御意でおぢやるが、拙者とても大寄合は望むところ、御迷惑ながら御兩所にて肝煎下されたいが……」

「畏つておぢやる、夫れ式のこと是最と安い儀ぢや、のう、原氏……」

「心得ておぢやる。」



と惣右衛門も承諾しましたから、是れより兩人して京都、伏見、山科、大阪などに散在する同志に檄を飛ばして、秘密の大寄合を致すことに成りました、さて其の場所は京は圓山重阿彌の別荘を借りまして、七月二十八日の辰の刻と申しますから、只今の午前十時と云ふ時刻でございました。

### 五〇 歡呼滿場に漲る

京畿に散布する同志は追々に意氣天を衝く勢ひで聚つて参りました、是れ實に七月二十八日で一擧を決行する最後の大寄合でございましたが、彼の同志の假面を被つて萬一の僥倖を心掛けた輩は、徐々と御家再興の望みも絶えましたので、化の皮を脱ぎ大頭のところでも缺席する者も出来、常に強がつて内藏助の親類を吹聴してゐた、進藤源四郎、小山源五右衛門などは、姿を見せませんでした。

されど今日この席に聚る連中は、人は人なり我れは我れなり、我れは人に因つて事を爲すにあらず、我れは吾が爲さんとする處を行ふなりと云ふ、正眞正銘の義に聚る同志ばかりでありましたから、來たらざる者ありとて其様ことに頓着なく、何れも決意面に溢れて頼しく見える。

内藏助は例に依て慎重の態度で、容易に口を開きません、一座は暫く無言で殺氣自から滿場を掩ふ光景で、何れも片唾を呑んで控へて居りましたが、老骨の間瀬久太夫老人肩を一揺りゆつて席を進み出で、

「各方のやうに只だ睨み合つてばかりゐたとて何時果つべきでおぢやらぬぞ、老人は老人同志とやらで、此ごろ堀部彌兵衛よりよこされた書面に、上方の永分別にも厭き果て申した、自分は最う八十に手が届き餘命の程も覺束ない、若しこの儘で枯れ果てゝ了へば、泉下に在す亡君に對し奉り、何の面目あつてお目通りが出来申さう



や、無分別かは存ぜねど、老後の思ひ出に吉良の邸へ突き入つて、日頃手馴れた手槍を力に、屍を庭前に曝さうと臍を固めたとあつたぢや、拙者として最う六十の坂を越した老人、所詮壯い方々と一緒になつて働き、甲斐くしき業は出来さうもおぢやらぬが、此の席の御評議次第に依つては、彌兵衛老人と生死を共に致す所存でおぢやる。」と流石に氣骨稜々、壯者を凌ぐ勇氣が溢れて居りました、小野寺十内これを聴くと其の儘進み出で、

『仰せ如何にも御最もに存ずる、十内とても老人仲間、只だ譯も無く何時までも斯く致しては居られ申さん、今日の決議次第では、死出の山踏み御同道申す覺悟でおぢやるが、併し最う山も見えておぢやれば、大夫の御賢慮もおぢやらう。』  
と夫れとなく内藏助の決心を促しまして、決行を速かならしめんと圖ります、老人側から斯う一舉の急進を仄かされては、黙して居られぬ堀部安兵衛、争でか猶豫いたし

て居られませう。

『至極の御決斷でおぢやる、我れ等は初めより晝夜その事ばかり心掛申したが、大夫の厚き御思召も在したること、主家の御再興は臣子の分として誰か願はざるものゝおぢやらうや、夫れゆゑに今日までは忍び申したが、折角の御盡力も甲斐なう、大學様の御處分も濟み、主家の御運も申し上げやうなき御事でおぢやる、斯く成り果た上は生存へて何かせん、一同に申し合せ間瀬氏の仰せの通り、警の館に討て入り切死いたすより道はおぢやるまい、御意見の程伺ひたうおぢやる。』

と頗る壯重に頗る力を籠めて述べ、内藏助の面を見上げて決答を迫りました。  
席上二十餘名の視線は内藏助に注がれます、泰然自若として人々の意見に耳を傾けて居ました内藏助は、炯々人を射る眼光で、デロリ一座を見廻し、

『一難に逢ふたびに方々の御誠忠はます／＼顯れ、只だ感激の外言葉は更におぢやら



ぬ、之れまで内藏助の取つて參つた行動に就いては、さこそ手緩く御不満足でおぢやつたらう、拙者として方々の所存も承はる度に、肉躍り血沸く思ひを致し、直ぐにも決行いたしたい心地はおぢやつたが、我れ等は世々淺野家の祿を食み、淺野家の御恩を蒙つた者でおぢやれば、假令一縷の望みにても之れある間は、御家再興の事に心を摧くべきが至當であらうと存じたぢや、然るに此度の御沙汰、大學様の御成行きにて御家は全く断え申した。」

と言ひながら、感慨の涙はらくと落つるを拂ひまして、

「此の上は最早何事かを思慮すべき要もおぢやるまい、只だ武士道の本意最後の一舉あるのみ、内藏助として方々に御同意を致すが、之れを斷行いたすにも亦た道がおぢやるツて、必死の覺悟ばかりで、仇家へ討入つても敵の首級も揚げ得ず、徒らに犬死するやうでは、先君の御耻辱を重ねる事と相成らう、不肖なれども拙者に多少用

兵の心得もおぢやれば、十月までに後事を處分いたし必ず江戸表へ下向し申さん、同志の方々も其の前に寄りく御出府召さるやうに爲し、各自手の盡くせるだけ敵の動靜を探りて當日の便に供すべく、呉れくも拔掛けの御手出は堅く相成り申さぬぞ、方々何うか此の議御承引下され。」

と嚴かに言ひ了りました。

列席の人々は歡聲を發しましたが、誰れ云ふともなく、誰れが持ち出したとも無く、乍ち席上に盃盤が運び出される、酒家の堀部安兵衛突然ツカくと内藏助の前に進み出で、

「大夫が斯く速かに御同意下され、江戸表に在るものも如何ばかり、満足に存じ申すでおぢやらう、安兵衛改めて御禮申し上げたう存する……」

「痛み入つたる其の御言葉、内藏助汗顔の至りでおぢやる。」



と會釋しながら傍の盃ガイと飲み乾し、

「堀部氏、一献参らう！」

「是れは何うも……有難く頂戴いたす。」

と安兵衛は飲む、之れを始めとして酒は一座を浸し、興趣ますます加はるや、小野寺十内は手鼓を打ち、

「剛者の交はり頼みある中の酒宴哉」

と小謡をうたひ出れば、内匠頭の近侍で亂舞に堪能の聞えあつた原惣右衛門は、扇をサツと開きまして、

「富士の御狩の折を得て、年來の敵、本望を達せん」

と自ら舞ひ自ら謡ふて席に歸るなど、老も若きも早や敵の首級を揚げたやうに歡を盡くして深更に解散しました、當日この寄合に列席した人々は、

大石内蔵助	大石主税	原惣右衛門
小野寺十内	小野寺幸右衛門	間瀬久太夫
間瀬孫九郎	堀部安兵衛	潮田又之丞
大高源吾	武林唯七	中村勘助
不破數右衛門	貝賀彌左衛門	大石孫四郎
大石瀨左衛門	矢頭右衛門七	岡本次郎左衛門
三村次郎左衛門		

等でございます、此の日は丁度江戸にあつては、兄の罪に坐し木挽町の邸に閉門されたる淺野大學長廣が、本家藝州侯へお預の身となり、罪なくして配所の月を見ねばならぬ哀れな旅立の日でありましたは、偶然とは申しながら不思議な心地が致すではありませんか。



### 五一 眞偽撰擇の使者

逸りに逸る同志を抑へて來ました一縷の望み、御家再興も大學の左遷で頼みの綱は切れ、圓山會議に因つて、いよく最後の手段を取る討入りと決したので、同志の意氣は火中に油を投じたやうに燃え立ちました、時機の尙早を楯に討入りを遂巡する内藏助の意見を手温しと、同盟を分離して事を擧げやうと決心し、同志糾合に上京した堀部安兵衛は、大學の左遷が動機と成つて討入りに總一致しましたから、安兵衛は會議の果てた翌日直ぐ江戸表へ歸り、討入りの準備に掛らんと暫くも猶豫をしませんので、内藏助は潮田又之丞に同行を命じます、又之丞は委細畏まつたとあつて行李倉皇、安兵衛と二人京都を立ち江戸に向つたは七月二十九日でございました。

内藏助の手許にある同盟契約の血判書は百二十餘枚に達して居りますが、此の中に

は反古紙同様なのがある、口頭ばかりで強がつても腸の腐敗た日和見連中も多くあらう、お家再興を的に僥倖を冀がふ愛身派は、追々馬脚を現して圓山會議の時となるや、病氣を言ひ立て列席せぬも多く、全くの腰拔共は姿も見せねば、斷りも寄越さぬ奴さへございましてので、内藏助は同志の淘汰を思ひ立つたものの、一旦神文誓約までした輩を疎外して事を擧ぐるも不本意であるから、到底役にも立たぬ瓦礫は除外するに若かず、可しく、一列一帯に神文を返却すれば此方の道も立ち、臆病者腰拔ともの面皮も缺けず、後々に言を遺す憂ひも無くなる譯と、万事用意周到なる思慮から、斯かる掛引きに事馴れたる貝賀彌左衛門、大高源吾の二人に意を含め、兼て手許に收めある中より既に化の皮の剝たもの、胡散臭い匂ひのある日和見連の神文數十通を托して、所謂同志顔するもの、許を歴訪させました。

彌左衛門と源吾は八月五日から、山科、伏見、京都、大阪の近傍、遠くは赤穂のあ



たりまでに散在します同志を尋ね、一々面會を求めて述べた口上は、

「我れ等今日推参いたしたは、大夫の命をお傳へ申さんが爲めでおぢやる、大夫には昨年以來貴殿方と御相談なされ、只管御家の再興に苦心せられた甲斐もなく、大學様には此度の御始末となり、何とも残念至極でおぢやりまするが、斯く成り申してはお互に盡すべき道も塞がり、忠義立も最早これ限りと相成り申した、然れば何時が何時まで盟約を續けたとて所詮及びなき事でおぢやる、兎も角お差出しに成つた神文盟約は御手許へ返却いたし置まきするで、後日また機會もおぢやつたならば、重ねて御相談ないたしたう存する、斯くの始末でありまするので、御銘々に御身の振方を御遠慮なくお着けなさるやうにとの仰せでおぢやりまする。」

と言つて一々その神文を手渡しました。斯る連中は内々内藏助の使者と聞いて怖かな吃驚、驅り出されるので無いかとビク／＼もので面會しますと、案に相違した神文の

返却であつたので、

「是れは／＼御丁寧なお使ひ、如何にも大夫の仰せの通り、御苦心も貫徹せず、拙者ども、遺憾千万に存する、成程大學様の御成行きも斯くの次第では、最早詮方もおぢやるまい、何うぞ大夫へも宜しく仰せ上げられるやうに……」

と神文を受取つてホット一息吐き、ヤレ／＼是れで厄難を逃れたぞ、まア生命賭けのチヨボ一は止めだ／＼、ア、君子は危きに近寄らずと面に喜色を帯ぶる者が多いので、兩人は腕を扼し悲憤慷慨に堪へず、面に唾きし去らんと思ふやうですが、腸の腐つた腰抜ども、案山子に齊しい奴輩の顔を見てゐるも、小癩に障つてムカ附く胸を抑へ、次から次へと歴訪して参ります中には、純忠正義の士も稀れにはございますから、兩人の口上を聴くうちに、見る／＼皆はキリ、と上り、満面に朱を注いでデリ、／＼と膝を詰め寄せまゐり、



「こは怪しからん仰せでおぢやる、此のお使には何等かの意味がおぢやらう、さア夫れ仰せられ。」

と敦圀かゝれて、兩人はます／＼沈着き拂ひまして、

「我れ等兩人はたゞ大夫の命を受けて、貴殿の御神文を返却いたす爲めに参つたまででおぢやる。」

と飽くまでも平氣を装ひ、其の眞意を看破せんとする、純忠正義の士は憚然として怒聲鋭く、一刀を引寄せまして、

「奇怪なる仰せを聞くものかな、我れ等は神文の上に誓ひ斯く血をそゞぎ申したは、

御家再興の望みも勿論でおぢやるが、不倶戴天の君の讐に一太刀たりとも恨みを報

いん所存でおぢやる、御家再興の望み既に絶えたる今日、何ぞをめぐと生を偷み

申さうや、我れ等は左様な腰拔ではおぢやらぬ、此の期に及んで盟約を返さうとさ

る、大夫も大夫であるが、又これをぬけ／＼と持ち來たる貴殿達も見下げ果てたる貴殿達でおぢやるわ、大夫を始め貴殿達は最早主家の御恩を忘却され、仔細らしい盟約も一時の人氣にされたのでおぢやるか、返答次第で存じ寄りがおぢやる。」

と刀の目釘に濡りをくれ、挨拶に由つては一刀兩斷にも爲さん權幕でございますから、彌左衛門と源吾と顔見合せて俱に爲すべき士と頼しく思ひますが、中々容易に氣を許しません、全くの純金無垢であるか鉛の餽詰であるかを篤と鑑定が附かないうちは、おい左様かと胸底の秘密を明かしません。

「左様拙者として、未だ何等の所存もおぢやらぬが、大夫殿と進退を俱にいたす迄でおぢやる。」

と彌左衛門は源吾の方へ目配をする。

「拙者も何とか身の振方を附ける覺悟でおぢやる。」



と云へば、怒氣は一層加つてハツタと睨みつけ、  
 「左様の腰拔とも知らずして、俱に大義を議つたは心外千万でおぢやる、最早言葉を交すも汚ららしい、トツトと立ち去れ！」  
 と席を蹴立て去らんとする正義の士に逢へば、兩人は左右より袖を控へまして、  
 「先づお待ちやれ、左ほど忠誠を存せられるか、實は去ぬる廿八日圓山の秘密會議に於いて大夫も決心されたぢや、夫れに就て今一度方々の御覺悟を探らん爲め我れ等が使者、大夫が深い賢慮あつてのお試し、事體は切迫し、大夫も十月に下向ぢや、貴殿もその以前に御出府成されよ。」

「ふむ、左様でおぢやつたか……」  
 と喜色満面に漂ひ、雀躍して勇み立ちます。兩人は神文を入れた同士を一巡いたして、金と鉛とを見分けて立歸り、一々内藏助に報告いたした。

是れにて臆病の腰拔どもは一掃し去られ、残るは純忠正義の一粒撰りばかりとなり同盟一致はいよく固くなりました。

### 五二 仲秋觀月の密會

圓山會議の翌日、即ち七月廿九日に京都を發足いたした、堀部安兵衛と潮田又之丞は道を急いで東海道をドン／＼下つて参りました。  
 兩士が京都を立ちまする前日、江戸木挽町の住み馴れた邸は召上げられ、其の身は罪なくして本家松平安藝守にお預けとなつて、藝州廣島へ遠謫の途中、是れも東海道を進まぬながら是非なく上つて参りますので、遠州濱松の驛に差し掛るとき、安兵衛又之丞は一行とピタリ出會す事に成りました。

濱松の棒端に掛つて腰掛茶屋に休息して居りました兩士、フト聞き込んだは淺野内



匠頭様の御舎弟はお氣の毒や、本家にお預けになつて、今に此の宿を通られるさうなとの風説でございましたから、忽ち耳を立て、

「堀部氏、大學様が今に此處をお通りなさるとやらの取沙汰のやうぢやのう。」

「左様、何うやらそんな風説ぢや、永い間の御閉門、さぞお疲れでもおぢやらうし、御残念でもおぢやらう。」

「いよ／＼大學様のお通りであれば、我れ／＼は考へものでおぢやる。」

「うむ、其の事ぢや、情に於いては親しくお目通りして御機嫌を伺ひ申すべきであるが、放心お目見得して、後難を大學様に被せるやうな事になつては相成り申さん、ハテ何う致したものでおぢやらうのう。」

「永のお別れぢや、御同様に御機嫌を伺ひたいは山々でおぢやるが、此處でなまじひ拜謁することは宜うあるまいぢや。」

「左様ぢや、他日彼の事を首尾よく参つた後、公議役人の耳に入つたなら、如何なる御嫌疑が御身に掛らうも知れ申さん、夫れよりは却つて素知らぬ體に過ぎる方、大學様の御身に仔細がおぢやるまい。」

「こゝは目を眠つて過ぎ申さん、是れと云ふも皆警の爲す仕業、今更に一段腕が唸る心地が致して参つた……」

と澁茶を啜つて相談を決し、待たしてあります馬にヒラリと兩士の騎るとき、遙に五六挺の駕籠、お供廻りも僅に數人悄々と此方に向つて來ましたは、確にそれと勘付きましたから彌左衛門も源吾も面を深き編笠に隠し、馬の足並急がして一行と摺違ひながら、暗涙を呑んで騎け抜けホツト吐息を漏し、ア、世が世なりせばと感慨に堪へませんでした。

兩人が江戸に着きましたは八月の十二日でございますが、又之丞は江戸に出ると



宿屋へ泊るか、又は同志の僑居に寄食するでありますので、先づ草鞋を脱いだは吉田忠左衛門の芝の假住居でございます。

殊に此度又之丞の齋して來ました使命は、一擧の成敗に關する重要な相談であつて尤も秘密にいたさねば成りません、江戸の同志中にも随分景氣取りのヨタも居る、風向き次第でくるり／＼と變る者も居ますので、會議を開いて上方の決心を告げ、今後同志の執るべき順序をも定めねば成りませんし、敵方の探偵に心の用ひ方も打合せねば成りませんから、會議の場所はまことに困難でございます。

吉田忠左衛門は老巧の士で、思慮も深く分別も確で、流石に同志の副頭領であるから、又之丞より圓山會議の模様を聞き了つて、

「成程な、是りや同志の撰擇が中々困難であらう。」  
と申しますれば、又之丞は聲を低め、

「吉田氏口實には宜い景物がおちやりますぞや。」

「はて、何で御座らう。」

「左程お考へ爲さる迄もなく、最早仲秋でもございますれば觀月に假托て、船中に於て密議を凝したら如何でおぢやらう。」

「仲秋觀月、それは至極宜しからう。」

と忠左衛門は首肯きまして、早速同志のうちで精忠のものばかりを撰擇いたし「來る十五日に觀月會を舟中に催し候、間御來遊被下度云々」といふ手紙を出し、淺草金龍山下の遊船宿に舟遊の支度を命じました。

吉田忠左衛門の催す觀月の船遊びには、何等かの意味が籠つて居るであらう、只だ月を眺め酒を飲むが本意であるまいと、當日になりますと元氣な老人堀部彌兵衛などは一番掛に遊船宿に參つて待ちかける、船は二艘を繋留まして、双方何れへでも行き



通ひの出来るやうに造り、酒肴を堆く積入れて、金龍山下なる隅田川の流れに浮べました。

月は隈なく澄て空に一點の雲なく、水に金波湧き興深く、酒漸く廻るころを圖つて忠左衛門は、

「今日の方々は、同じ同志中にも嚮背未だ定らぬ輩は除き、純忠正義の方々をのみお招きしたのでおぢやるが……只だ今朝田氏が齋らし來られた大夫の命令を披露されまするで、此の上とも一致して事を擧げ申さん……」

と述べますと、潮田又之丞は圓山會議の結果を詳しく述べましたから、舟中歡喜の聲に満たされ、或ひは談じ、或ひは飲むうち船は次第く下つて兩國橋も過ぎ、永代橋も越えれば、月は品川の中天に昇り、水面一帯金波碎ける中に、此處に彼處に船を停め月を賞して謠ひ、盃を擧げて談じつゝ、驚天動地の謀計を協定しました。

船は夜更に芝浦から赤羽橋に着けて、上陸するもございましたが、潮田又之丞も此處から上らうとするを、堀部安兵衛は聲を掛けまして、

「潮田氏、我れ等武骨一遍のものでも、この明月を直ぐ眠るでもおぢやるまい、今宵は我れ等の住居にお出で下されい、此の舟で兩國まで上れば譯はおぢやらぬ。」

と勧めまするので、又之丞も、

「然らば、御厄介に成らうよ。」

と吉田忠左衛門等の面々に分れ、兩國近所より上るものと共に、又大川を登りまして橋際から安兵衛と共に上陸したのは、丑の刻今の午前二時近くでございました。

兩人は直ぐ本所林町の安兵衛の假住居には參りません、東兩國の回向院を横に眺めて、怨敵吉良家の前に出ますと、辻番の足輕がコックリくと坐睡をして居りましたが、二人の侍が高調子に話ながら來るに目を刺き出して睨む、その状は中々油



斷せぬ様子が見えます。安兵衛は聲を潜めて、  
「警の邸近所には何うも手頃な借家が無うて困るが、前原氏の隠るゝは彼處でおぢやる。」

「は、ア、好ところが有つたものでおぢやるのう。」

「是れより表門の方へ廻つて歸り申さう、此方ぢやく。」

と先に立ち案内されて参ると、表は長屋門であつて斯かる深夜ながら、門番所の窓からは燈火が映してゐる、門前で足を止めると窓を開いて往來に注意するなど、中々用心は堅固であるから、又之丞、

「中々嚴重らしい様子……」

「臆病風の内攻ぢやく、大分肌寒うなつて來た、イザ拙宅へ御案内申さう。」

### 五三 衆心收攬の智略

山科にて内藏助は徐々と準備にかゝりました、出發の準備も中々忙がしうございませが、一舉について軍資の供給や武器その他の整頓まで、皆その割策に出づるので、から容易な譯でありません、其の家を片付けるにしても世間の疑ひを避けねばならず、其の中で相變らず道樂者の態度を装ねば、折角こゝまで潜ぎつけた計略も、今一步と云ふところで化の皮を剥れては成りません。

そこで自分は備前岡山の親類池田玄蕃といふ人の許に暫く参ると言觸らし、家財什器は石東源兵衛の方へ送り出しました、石東源兵衛と云ふは表向の離別をした妻の兄でございませが、此の人の中々豪い人で、内藏助の監行や白痴を真似をするを、本心からで無いと承知して窃に幫けたとも申します。



兎に角荷物(とくかくにももつ)はドシ／＼(たじま)但馬(たじま)の方に送(おく)るやうになつては、最も寵愛(もつとちようあい)してゐたお輕(かろ)とて始末(しまつ)をせねば成(な)りません、全く備前(びぜん)の岡山(おかやま)へ一時(ひととき)とても入(はい)るのなら、時(とき)と場合(ばあひ)によつては連(つ)れて行(ゆ)かれぬ事(こと)もないが、内藏助(くらのおすけ)の岡山(おかやま)行き(いき)は心(こころ)にも無(な)い嘘(うそ)で、大志(たいし)を抱(いだ)きて最後の目的(さいごのめく)を達(たつ)せん旅立(たびだち)ですから、如何(いか)に最愛(さいあい)の妾(めかけ)だと云(い)つて討(うち)入りまで引張(ひ)つても往(ゆ)かれませんが、又(また)内藏助(くらのおすけ)のお輕(かろ)を愛(あい)するは、デレ助(すけ)の女色(ぢよしよく)に溺(おぼ)るゝのとは趣(おもむ)きを異(こと)にして居(を)りますので、一日(いちひ)お輕(かろ)を近(ちか)く呼(よ)び、

「其方(そち)も能(よ)く事(つか)へてくれるので、斯(こん)様(な)ことを言(い)ふは本意(ほんい)ぢやないが、私(わし)もいろ／＼都合(がふ)あつて岡山(おかやま)の方(ほう)へ参(まゐ)らねば成(な)らぬ、成(な)る事(こと)なら其方(そち)も思(おも)はぬでないけれど、世間(せけん)の手前(てまへ)左様(さやう)な儀(ぎ)にも相成(あひな)り申(まを)さぬぢや、氣(き)の毒(どく)であるが暇(ひま)くれるに依(よ)つて親(おや)の許(もと)へ歸(かへ)つてくれるやうに……」

と云(い)つて、いろ／＼の品物(しなもの)など澤山(たくさん)に與(あた)へて諭(さと)しますれば、お輕(かろ)は恨(うら)めしさうに内藏助(くらのおすけ)

の顔(かほ)を見仰(みあ)げ、

「お言葉(ことば)ではござんすが、妾(わかしよ)は何處(どこ)までもお供(まご)して参(まゐ)りたる存(ぞん)じます、思(おも)召(め)しに適(あ)はぬ不束者(ふつつかもの)でござんせうけれど、何様(なんな)ことでも御奉(ごほう)公(こう)いたしますれば、お傍(そば)にお置(お)き成(な)されて下(くだ)されませ。」

と云(い)ふも最(も)う涙(なみだ)のおろ／＼聲(こゑ)でございますから、内藏助(くらのおすけ)も素(もと)より木(き)の端(は)や竹(たけ)の片(かた)れでは無(な)い、況(ま)して粹(すい)と呼(よ)ばれてうき様(さま)とまで、假令(たとへ)心(こころ)になき振舞(ふるまひ)ながら云(い)はれるもの、酸(す)いも甘(あま)いも嚙(か)み分(わ)けて居(を)ますだけ、哀(あは)れは深(ふか)く同情(どうじやう)に堪(た)へませんが、心弱(こころよわ)くては退(しりぞ)けるに辛(つら)しと、

「其方(そち)の心(こころ)は能(よ)く知(し)つて居(を)るが、また私(わし)の身(み)になつても考(かんが)へて見(み)てくれ、其方(そち)の深切(しんせつ)は過分(くわぶん)に存(ぞん)じ居(を)るけれども、何分(なにぶん)この儀(ぎ)は許(ゆる)すことも出(で)來(き)ぬので、之(こ)れまでの縁(えん)と諦(あきら)めて思(おも)ひ切(き)つてくれよ。」



「はい、御無理とは更々思ひませんが、妾は何うあつてもお分れ申す氣はござんせん！  
いゝえ、何處までもお跡を慕ひお供をさして下さんせいなア。」

「夫れが聞分の無いと云ふのぢや。」

「否ぢや、否ぢや、否でござんす。」

とお輕はワツト泣伏て了ひました。

智慮分別も衆に勝れた英雄豪傑でも、人情といふものは一種の魔物でございますから、流石の内藏助も之れには閉口いたし、漸うお輕の父二文字屋次郎左衛門を呼び寄せ、因果を含めて親許へ引取らせまして、山科の隱宅片付の爲めと稱して京都四條の道場、金蓮寺中の梅林庵を借り入れ、其處へ移りましたは閏八月でございました。

當時は赤穂開城の際、御家再興と稱して除ておいた一萬兩の金も、同志の手當や運動費に使ひ、残り少なに成りましたので、山科の家屋敷は抵當にして金を借り、家財も

賣拂つて軍資に充てる程で、其の苦心經營は一通りでありませんでした。

彼れ是れしますうち、同志の面々は大方江戸へ下り、今は内藏助の傍らを去りかねる者ばかりと成て居ります處へ、江戸表から上野介の近狀を報じ、一日も早くと出府を促して參りました、殊に堀部安兵衛から寄せた報告は仔細に敵情が盡してあるので、内藏助の心は江戸の空を翔り壯圖勃々として禁じ難くなりましたが、如何にせん内外の用が混亂して、直ぐ出發する運びに至りませんから、憂の色は面貌に現れ煩悶の狀が察せられます、之れを觀た主税は父の前に進み出で、兩手を突いて最と懇ろに、

「江戸表の模様も切迫しまゐつたやうに存ぜられますが、父上の御出府も間も無き事におぢやりませうけれど、此の際御出府が一日延引いたしますれば、一日同志の銳氣に關りはしないかと、憚りながら心痛に堪へません、單に士氣の沮喪のみで無く、又々その間疑團の生ずる恐れも無しと申し難いやうに思はれまするので、私が出



府致したとて何の用にも立ち申すまじけれど、主税が出府したと同志に知れますれば、父上の御出府にも間の無きことと衆心を安堵させる方便とも成りはしまいかと存じまするが、思召しは如何でおぢやりませうや、萬一思召しに適ひ申せば、私に先發の儀をお許し下されたる存じまする。』

と言ひ出しました、流石は内藏助の血を受けた少年でございます、後日雪夜敵の館へ仕掛る時、搦手の大將と立てられただけ、其の意氣といひ器量といひ天晴の心附きである、内藏助も莞爾して、

『それも宜しからう。』

と首肯いて、主税の申し出でを、未だ京都に居残る同志に議りますと、何れも手を拍て其の智慮あるに敬服いたし、

『流石は大夫の御令息でおぢやる、中々大人も及ばぬ御分別、憚りながら感じ入つて

おぢやる。』

と一も二も無く同意をしたので、主税は其の望みに任され先發と決しました。

主税の此度の行は素より生は望むことの出来ない旅立ちであつて、萬に一つも武運目出度は敵の首級を揚るまで、死の旅でございませうから、生前母に名残の暇乞を爲さんと但馬に赴き、永き別れを告げて京都へ歸りますと、内藏助は主税を伴ふて石清水八幡宮に参詣いたした上、老人には間瀬久太夫、同族には大石瀬左衛門、若黨には加瀬村幸七、また同志には茅野和助、小野寺幸右衛門、矢野伊助等を一行として、明年三月は亡君の三回忌であるから、御法會準備の爲め下向すると言ひ觸らし、九月十九日に京都を發足し、同月二十九日江戸に着き、石町三丁目小山屋彌兵衛の離れ座敷を借りて落付きました。

主税の見る處は少しも變りませんで、其の江戸に着しまするや、同志の面々は大き



に喜び、

「大夫の御子息が御出府されたからは、大夫も近々御出府に成らう。」  
と士氣大いに振ひ、陰然活氣を帯びて只管内藏助の下向を待つて居りました。

### 五四 燈暗數行虞氏涙

同志の人々で最う京都に残つてゐるは、關東の使命を果して歸つた潮田又之丞、その他では近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衛門、三村次郎左衛門の五人でございまして、内藏助は總ての用向を片付け、いよく十月七日に京都を出發して、是れ等の面々と東下することに決しました。

さていよく出發の前日六日には、今日を都の名残ぞと内藏助たゞ一人、供をも連れず紫野の瑞光院に詣でますと、院主の海首座は玄關に迎へ、

「さア何うぞ……」

と方丈に招じます、内藏助は最う此の寺も今が見納めと思ひますと、何となく懐しいやうな氣がして、何時になく四邊を見まはします、院主もその胸中を察しますので、

「いよく明日は御發足でおぢやりますか、お名残惜く存ずる。」

「山科に參つてより種々お世話に成り申したが、明日は當地を立ち、暫く江戸表に滞在する所存でおぢやる、亡君のお墓の儀は宜しくお願ひ申し上げます。」

「イヤ、其の事なら決して御配慮御無用、愚衲、確とお守を致し香華を斷すやうなことは致し申さず、懇ろに御回向を仕つるでな、お心置き無う思召されよ。」

「そは何より以て執着に存ずる、何分ともに宜しう。」  
と互に過去未來のことなど談じますれば、院主も亦た別れを惜み、夕陽の西に落ちる



まで瑞光院に居りましたが、何時まで在るも同じこと、辭して出づれば、院主も之れも門外に送つて内藏助の姿の見えるまで見送りしました。

内藏助は紫野を出で道を一條の方に取り、二文字屋に参りますと、早くも見付ましたは主人の次郎左衛門でございます。

「大夫様の御入來ぢや！」

と親子出で、迎へ、奥へ案内いたしましたから、内藏助も明日は京都を發足するにつき、一寸と暇乞にまゐつたと云へば、次郎左衛門夫婦は驚き、

「それは何たる急なお立ち……」

と呆れる、娘のお軽もいよ／＼の別れと聞いて悲しさが、また今更に増して臉も重く、たゞ俯伏し涕汗零るは一層哀れを深く致しまする、其の中に酒肴を並べ、

「御首途のお祝ひに酒一献お過し下されませ……輕や、何をぐ／＼致して居るぞ、

早くお酌をしませぬか……」

と側から言るゝに銚子を取つて寄れば、快潤の内藏助でございます。

「それは心入れの程忝けなうおぢやる、馳走に成り申さうか。」

と盃を引受け、常のごとく快よく飲む、お軽はその側にゐたもの、其の胸中の幾分は覺つて居りますから、明日の出發は扱こそ復讐の首途であらう、上邊には何の心配も無いやうであるが、嘸そ大きな心勞があらう、ア、是れが現世の生別であるかと、伶俐な女だけに疾くも覺りましたは、胸に迫つて苦しさに堪へかね、打萎れて僅に銚子を進めるので、内藏助も九腸を搾つて沈黙して居りましたが、忽ち氣を轉じ、

「何も左様鬱ぐことはない、此處しばらくのお別れぢや、さア其方も確りするがよい

一曲所望ぢや。」

と機嫌克く言ひ出しましたから、お軽も是非なく、



「それではお耻かしうござんすが……」  
と琴引き寄せて一曲を奏しまする、ヂツと聴き居た内藏助は、  
「何時きいても琴は好いものぢや、また明春にもならば歸つて来るほどに、縁あら  
ば寛々と逢はん。」

「これが最うお別れで……」

とは早堰へられずなつて泣き伏すお輕を宥め賺して、内藏助は二文字屋を出ますと、  
六日の月は西に落ち夜風は肌に沁みて寒く、一條の通りは人の往來も稀れに成つて居  
りました。

明くれば十月七日の朝であります、この頃は梅林庵も引拂つて京は三條の旅籠屋に  
泊つて居りましたから、潮田、近松、菅谷、早水、三村の外に若黨の室井左六など中  
間その他で同勢十人、京を立ちました、道中は日野家人恒見五郎兵衛と大書した繪

符を附けて長持二棹を雲助に昇かせ、公儀の關所くを欺むき、悠々と五十三次を押  
下つたは大膽な振舞でございます。

内藏助が日野家人と稱して少しも憚らなかつたは、理由のあることで、去年内匠  
頭が切腹された當時、赤穂に置れた妾腹に一人の姫君がございまして、若し主家再興  
の成らぬ時は、亡君の御血統を諸侯の中に存したいと云ふ深い思慮から、京都の公卿日  
野家とは少しの由緒のあるを幸ひ、赤穂退去の折に預りました國用金を姫君の御養育  
料なり又は御化粧料なりとして、御成長の後然るべき大名へお興入れ下さるやうにと  
の約束で、日野家の養女に仕立しました處から、此の度の下向に日野家人と申す名目  
を許されたのだと申します、後この姫君は松平兵部大輔の奥方となられ、泉岳寺へ  
も數々參詣されたと申すことでございます。

餘事はさて措き、内藏助の一行は十月廿一日相州鎌倉雪の下に着きますと、此處に



は吉田忠左衛門と富森助右衛門が出迎へ、兎も角助右衛門が川崎在平間村に建築した隠家へ案内いたしました。

一行は此處で十日ばかり江戸の光景を窺ひましたが、敵方では内藏助の下向を夢にも知らぬことが確まり、十一月五日にいよいよ江戸へ乗込み、前月より主税の泊つて居る石町一丁目の小山屋の控家に同宿しました、此の小山屋と云ふは頗る繁昌した旅館でございますして、海内諸州の訴訟人は多く此の店に宿ります處から、主税は垣見左内と稱し、近江の豪家である、公儀へ訴訟の筋あつて下つたものだと吹聴してあるので、内藏助の垣見五郎兵衛は左内の叔父で、此の度の訟訴に後見する爲め下つたのだと偽つて居りました。

内藏助の出府は同志の喜び一通りでなく、我れもくと尋ねて參る者が多い、是れでは世間の嫌疑も圖られませんか、此處へは吉田忠左衛門、原惣右衛門、小野寺十

内、間瀬久太夫の外は出入せぬことに取り極め、是れ等の數人が快擧の打合せ心を碎きまして、會議の結果を各自へ傳へることに致したが、夫れでも猶ほ油斷はしません、小山屋へ出入る人々は何れも深編笠に面を隠し、身には鹿服を纏ひて只だ一刀を腰にするもございませれば、又丸腰で町人風を装ひまして、裏口よりこそくと參るもございませぬ。

斯ういふやうに苦心慘憺いたし、一方にはまた仇家を窺ふに米屋となり、八百屋となり、或ひは又心にもなき罪を作るもあり、千變萬化の手段を回らし、敵情視察に肝膽を碎いて居りました。

### 五五 同志江戸表に聚る

同志の人々は皆江戸に聚り、夫れくりに假住居をなし變名をする、軍學者と觸込む



者、醫者だと云ふ者、町人だと申す者など、思ひくりに化ツ競をして居りました、其の假寓變名等の跡を調べて見ますと、

石町一丁目小山屋彌兵衛裏座敷(借主、主税)

垣見左内(大石主税) 垣見五郎兵衛 (大石内藏助)

外に池田久右衛門

仙北中庵 小野寺十内 小田權六 大石瀬左衛門

外に十庵、又四郎 町政右衛門 菅谷半之丞

原田斧右衛門 潮田又之丞 森清助 近松勘六

町嘉兵衛 三村次郎左衛門 外に三浦十右衛門、田口三介、

垣見家若黨加瀬村幸七、室井左六、森清助家來甚三郎

新麴町六丁目大屋喜左衛門裏店(借主、一眞)

新麴町六丁目大屋喜左衛門裏店(借主、一眞)

田口一眞 吉田忠左衛門 田口左平次 吉田澤右衛門

外に篠崎太郎兵衛 和田元眞 原惣右衛門

松井仁太夫 不破數右衛門 外に前田善藏 町人八左衛門

古澤吉右衛門 寺坂吉右衛門

新麴町四丁目、和泉屋五郎兵衛店(借主、嘉兵衛)

山彦嘉兵衛 中村勘助 三橋貞淨 間瀬久太夫

三橋小一郎 間瀬孫九郎 郡八郎 岡島八十右衛門

岡野九十郎 岡野金右衛門 仙北又助 小野寺幸右衛門

外に僕一人

新麴町四丁目裏、大屋七右衛門店(借主、三助)

原三助 千馬三郎兵衛 杉莊喜齋 間喜兵衛

同志江戸表に聚る



同志江戸表に聚る

杣莊十次郎

間十次郎

杣莊新六

間新六

外に杣莊半七

町人重介

松屋新介

中田藤内

中田理平次

新麴町五丁目、秋田屋權左衛門店

山本長左衛門

富森助右衛門

芝通町三丁目濱松町、檜物屋惣兵衛店

高島源之右衛門

赤垣源藏

初八丁堀、後本町

村松隆圓

村松喜兵衛

武助

外に萩野隆圓

深川黒江町、春米屋店

矢田五郎右衛門

西村丹下

奥田貞右衛門

西村清右衛門

芝源助町

内藤十郎左衛門

富田藤五

内藤僕一人

南八丁堀

吉岡勝兵衛

協屋新兵衛

貝賀彌左衛門

本庄林町

田中玄昌

田中貞四郎

南八丁堀湊町平野屋十左衛門裏店

片岡源五

大高源吾

清水右衛門

外に水木又七

磯貝十郎左衛門

茅野和助

植松三太夫

外に萩野十左衛門

村松三太夫

町人助五郎

村松三太夫

町人喜十郎

矢頭右衛門

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

町人喜十郎

同志江戸に聚る



同志江戸に聚る

長江 長左衛門 堀部 安兵衛 三島 小一郎 横川 勘平  
石田 左膳 木村 岡右衛門

外に町人八兵衛

此外變節者、毛利小平太、山田庄左衛門、中村清右衛門、鈴木重八と僕一人、本庄

三ツ目横町紀伊國屋店(借主、九郎右衛門)

杉野九郎右衛門 杉野 十平次 町嘉 右衛門 勝田 新左衛門

渡邊七郎右衛門 武林 唯七

本庄二ツ目相生町三丁目(借主、五兵衛)

米屋 五兵衛 前原 伊助 小豆屋 善兵衛 神崎 與五郎

外に美作屋善兵衛

兩國矢の倉米澤町(借主、平右衛門)

馬淵 平右衛門 堀部 彌兵衛(妻子同宿)

其の外倉橋傳助は倉野十左衛門と稱し、又米屋五兵衛の手代とも成つて居ました、早水藤左衛門は曾我金介と假名して大石父子の垣見左内、五郎兵衛と同宿して居たやうであります。

斯うお膳立は出来た、此の上は最う討入りの時期を定めるばかりと成りましたので同志中の壯者を四組に分け、毎夜交替にて吉良上杉の用意を偵察させる、殊に上野介は此のころ上杉家に隠れて、本庄の邸には左兵衛ばかりだとの風聞もあるから、其の所在を突き止るが大事でございました、偵察の命令一下、壯者等は雀躍いたし、或ひは下人に身を窺すもありますれば、又町人に扮装もあつて、白晝は人の嫌疑を惹起すやうな事があつては成らぬと、日暮から蝙蝠の如く其の假宿を飛出し、夜る夜中人目の關を避けながら、東の空のほのくくと白み渡るまで讐敵の近傍を徘徊なし、上杉家

同志江戸に聚る



の動靜を探るに力めました、同志の幹部にある人々とて決して探偵を壯者にのみ任せ  
て置かぬ、吉田忠左衛門の如きは毎夜のやうに自ら偵察にも出て、敵と狙ふ吉良家は  
勿論、吉良家に接する隣家、または其の近所の大路小路、脱け裏まで地の理を測量し、  
若し上杉家より加勢の兵を出したら、何れの橋際何處の入口にて防がんと、進退掛  
引きまで劃策しましたは、流石は山鹿流の濫奥を極めた大石内藏助、吉田忠左衛門、  
小野寺十内等の兵學に達した人々が、専門の智識を盡しての計畫でしたから、兎の毛  
ほども手落は無かつたのでございませう。

一方は斯うして偵察をするが、此の節容易ならぬ風説が立ちました。

『この頃赤穂浪人が大分御府内に入込んで来て、上野介殿を狙ふさうぢや。』  
とチラ／＼人の口端に出るので、敵方に如何なる手段を回らし内藏助を窺ふやも知れ  
ぬとあつて、内藏助の出入には同志中の勇士が二三人が見え隠れに護衛する程でござ

いますから、内藏助は窃に同志を集めて萬一の場合に處する約束をいたしました、そ  
れは、

『自分は敵方の爲めに身を傷るやうな事は決して無いが、此の場合若し不幸にして同  
志の中、公儀の手に召取られて密謀の露顯した時は、お互の武運もそれ迄と諦め、  
一同打揃ふて名乗出で、赤穂開城以來の顛末を有りの儘申上げ、此の年月盡した我  
れ等の孤忠を明かにいたして、屑よく御所分を受けるの外おぢやらぬ、方々此の儀  
を確と御心得おかれ度。』

と宣言したのでございます。

用心には更に油斷をしませんし、偵察の歩はいよく進みまして、堀部安兵衛はそ  
の親しい朋友の手に由り、吉良邸の先住者松平登之助の家來が持てゐた主家の繪圖  
を手に入れました、今の吉良邸は松平家で住はれた時より多少室内の様子が變つてあ



りませうが、大體に於いては變更して居ない、唯一のものでありましたらう、夫れに岡野金右衛門は大工の棟梁娘と戀に落ち、其の大工から邸の建築當時の設計圖を手に入れます。

此處で此の兩繪圖について、神崎與五郎と前原伊助が、吉良家移住以來變更した處を取調べる重任を托されましたので、兩人は苦心に苦心を重ね、有らゆる手段を回らし、吉良家の下部召使ひなどを手懐けて、それと無く間取の様子を穿り出すに心を痛め、或ときは長屋へ入込みて邸内の模様をも探りますに、小豆屋善兵衛と名乗り大膽な神崎與五郎は、のこくと内庭まで立ち入り、散々に叱られて門外へ追ひ出された事もございました。

又同志中の好男子磯貝十郎左衛門は、吉良家の奥に奉公する女と懇親を結び、上野介左兵衛の居間まで探り出します。

また大高源吾は呉服屋に化濟し、茶道の宗匠四方庵山田宗偏から、上野介の様子を聞き出しますするなど、偵察密探も届き討入りの豫備行爲は完全に整ひました。

### 五六 時機漸く熟せり

元祿十五年極月十四日は、播州赤穂五萬三千石の城主、從五位下朝散大夫淺野内匠頭源長矩の遺臣、大石内藏助良雄等四十有餘人が、舊主の怨敵たる前の從四位下、侍從少將吉良上野介義央を討つて、本懐を達した日であることは、新しい記憶を呼び返すまでもない、文弱に流れんとした士氣に興奮劑を與へ、千古不朽に美しい名を遺した時でございます。

十二月の半ばといへば只さへビュービュー風の吹き荒み寒い時節、十三日は就中前夜から大雪で、江戸八百八町は一面の銀世界でございましたが、夕方になつても小歇み



なく、彌が上にも降り積り、雪は鷲毛に似て飛で散亂し、人は鶴鷺を被て立て徘徊すといふ光景で……日が暮れては道行く人も絶えく々と相成り、平生は芋を洗ふやうに混雑します盛り場も、何時になく寂寥して僅かに戸を漏る火影の雪にチラ／＼と輝くばかりでしたが、十四日には朝から雲切がして霽模様となりましたので、一同の喜びは一通りでは無かつたらうと思はれます。

豫ての約束でございませうから、浪士の面々は三々五々覺書の第一條に由て、定めてある三ヶ所へ追々と繰込んでまゐります、この三ヶ所と申すのは、本庄林町の堀部安兵衛武庸の宅、本庄三ツ目横丁の杉野十平次次房の宅で、是れはみな浪人の劍客と觸込んで借宅いたし居つたのですから、大勢の人が集つても怪まれることがありません、今一ヶ所は神崎與五郎則休と前原伊助宗房が、本庄の二ツ目相生町三丁目に小豆屋といふ屋號で米屋を出してゐた家で、當夜の敵吉良の邸に最も近いところ、茲が林

町へ集つた者と三ツ目に集つた者が落合ふ最後の集合點でございました。

扱討入に就ては覺書と起請文に一斑の方略が示してありますから、一寸披露いたしておきませう。

起請文前書之事

冷光院様御怨敵吉良上野介殿可一打取志有之侍共申合候處、此節大臆病之者共變心退散仕候族を差含き、只今申合必死と相極候面々は、御靈魂可被遊御照覽一候事

一上野介殿屋敷へ押込候働之儀功之淺深不可有之、上野介殿印揚候者も、警固一通りの者も可爲二同前一候、然る間組合働役好申間敷候、尤前後之事不可致候、同衆之義一味致合體如何様之働役に相當候共、少も難澁申間敷候  
一一味各々存寄被二申付一候處、含二自己之意趣ニ申妨げ候義有之之間敷候、誰にても當



然可ニ申合ニ兼て不快之心底有之候共、働之節各所を專に可ニ相働一事

一 上野介殿十分に討取候共、一命可ニ遁覺悟無之上は、一同に申合候て、散々に相成間敷候、手負之者互に助合其場え集可ニ申事

右四箇條相違之時は此大事成就不可仕、然ば相背候者は退散大臆病者と可ニ爲

二 同然一事

一定日相究り候は兼て定候通、前日の夕刻より物靜に定置候、三箇所へ集可ニ

申事

一定日之印揚候へば引取に可致ニ持參、其時は首尾次第其體之上着を剝包持參候事

一 途中にて御見分之方有之時、挨拶に此印は亡主の墓へ持參仕度存念に御座候、然共御許無之候は及ニ是非候、御惡み之印むさと打捨可ニ申様無ニ御座候上

は、御下知を以て彼屋敷へ被遣候様にも可有ニ御座候、其段は御差圖次第可仕候、首尾能持參候は、泉岳寺御墓へ備へ可ニ申事

一 子息之印揚候は、不及ニ持參、打捨候覺悟心得之事

一 味方之手負は、隨分成次第に引退分別肝要に候、乍然肩に懸候義難溢候は、印揚候て引取可ニ申事

一 上野介殿討取候時、相圖之小笛を段々吹懸總容へ可ニ爲知事

一 鉦之相圖は總人數引取候時打可ニ申事

一 引取場は無縁寺たるべし、但し無縁寺へ不入候は、兩國橋際廣場へ打寄可ニ申事

一 引取候途中へ近所之人數出押留候節は、其實を告候て、私共何方へも隠れ去事更に無之候、無縁寺迄引取公儀より之御使を受、旨意可ニ申上志に候、乍去無



一 彼屋敷より追掛候者有之候はゞ、總人數踏止り勝負可仕覺悟之事  
 一 勝負之内御檢使有之候はゞ、門不開候て潜より一人出、只今兩人共討留候て  
 味方人數呼集候て、御下知を可受覺悟に御座候、私共一人も遁去候、所存會て  
 無之旨可申候、門を開候、様被仰付候、共、開不申候て挨拶可申候、打入候  
 者共屋敷中打散罷在候へば、門内へ御入被成候時、卒爾之義無心許一奉存條  
 最早段々打寄候、間、追付門を開可懸御目旨申上、堅く門を開申間敷事  
 一 退口は裏門より引取申可事

一 乍勿論之義、討留候覺悟、總容死之心底致決定候、右者引取候節之覺悟、胸中に  
 含候て、討入候得者臆病に似たれ共、然共退去候ても必死之面々に候得者、討入  
 時之丈夫の覺悟專要之儀に候、不及申候得共、各々必定粉骨之、尙尤候也  
 この覺書は一味同盟副將であつた吉田忠左衛門が筆を執つたもので、同志に頒ちま

したは十二月二日、頼母子講に假託て深川八幡前の大茶屋でございました、此時の人  
 數は四十九人でしたが、さアと成ると兎角生命の惜しいものか、四日には矢野伊助が  
 出奔する、十日には毛利小平太が駈落いたしました、この十日はいよいよ討入が十四  
 日と極つた日でございますから、小平太の臆病未練も思ひ遣られます、それで討入の  
 ときは四十七人となつたのでございました、最も同盟を脱した臆病者は矢野毛利の二  
 人のみではございません、内藏助と肩を並べて居りました千石取の奥野將監、四百石  
 取の河村傳兵衛、または江戸屋敷詰で急進派であつた高田郡兵衛、内藏助の家來瀬尾  
 孫左衛門、またはお馴染の小山田庄左衛門など七十餘人ございます、斯く多くの變節  
 漢の臆病侍はありましたが、唯だの一人でも裏切を爲し吉良家へ内通した者のなか  
 つたのは、蚤の罌丸ほど恥辱といふことを心得て居つたからで、まだ二十世紀の  
 背徳漢に比べては、純朴な時代思想に支配されて居たことも追想が出来ます。



五七 首途を祝ふ酒宴

兩國矢の倉米澤町に浪宅を構へて居りました堀部彌兵衛金丸は、一味同盟中の高年  
 で七十六歳の老人でございますが、老てます／＼壯なるとは此様な人をいふのでござ  
 いませうか、十二月の十日に大高源吾忠雄が吉良上野介が年忘の茶の湯を催すことを  
 探り出す、また横川勘平宗利も同じことを、共に兩國に住居いたし吉良左兵衛の師匠  
 で、四方庵山田宗遍から聞出し、それではと、十四日の夜に仕懸ると極つたのでござ  
 います、扱いよく／＼左様極りますと、同志の人々は勇氣日頃に百倍します中に、年こ  
 そ取つて居りますが、彌兵衛老人何條壯者に劣るべきやと意氣天を衝き、當日の到る  
 を指折數へて待ちに待つて居りました。

いよく十四日と成る、晝間から討入の首途と祝ひの準備を、武士が戦場に赴きま

する出陣の吉例に形取り、それ／＼の用意萬端を老人自ら指圖いたして整へさせ、さ  
 ア是れで可しと成るとドツカリ腰を据ゑ、尋ね來る同志を對手にグビリ／＼と飲み乾  
 し、頗る上機嫌で今半宵を過ぐれば、生命を賭して本懐を貫き達せんとする、大望の  
 目前に横はるとは更に思はれざる如く、緯々として餘裕ある大丈夫でございます。  
 空は紺靄を流したやう晴れ切つて一點の雲もなく、星影は瞬きをするやうに光を放  
 ち、十四日の月は今や東天に昇らんとする夕まぐれ、戸外は雪明にまだ暮切りませぬ  
 時、路次口にピタリと二挺の駕籠が下りますと、立派な武家が二人ツ、ト彌兵衛の浪  
 宅へ訪問ひ、

「御老體、お在やるかの。」

と云ふ聲に、彌兵衛は耳を欬てまして、

「ヤツ、お出でやつたか……御遠慮なう、ツ、ト……」



と自ら出迎へました客は、黨中の總大將と仰ぐ大石内藏助良雄が、石町の僑居より人を出し遣つた後、それ／＼後始末を附けて小野寺十内秀和と駕籠を備ふて本庄林町の堀部安兵衛武庸の宅へ乗込んで参る途中、まだ時間が少し早うございますから、矢の倉の彌兵衛老人の宅へ立寄つたのでございます、居合すものも素より生死を誓ふた間柄、年に相違はあつても遠慮のあるべき筈はございませんから、直ぐ二階へトン／＼と上がる、彌兵衛は最う大分廻つて居りますが、中々酒に精神の紊るゝやうな爺さんでない、燈心蜻蛉ほどの髷が乗つた薬罐頭も色揚をしてテラ／＼光らせ、「好うこそおぢやつた……肴は無くとも先づ祝ひの盃、一獻参らう。」

「これは辱けなう過し申さう……流石は御老體の御用意奥床しうおぢやるのう、十内殿。」

「如何にも……出陣の儀式に習はれた御肴、戦闘にかち栗、勝てよる昆布など時に取

つて好い先幸きでおぢやるワ。」

と小野寺十内も手を拍つて喜び、獻酬一順いたしました頃、今度はお吸物が出ました。内藏助は吸物の蓋に手を掛け、

「ハハ、ハ、茶鳥の吸物でおぢやらう。」

と云ひますと、彌兵衛老人は莞爾いたし、

「寒鴨一羽料理ツておぢやる。」

「敵の首級を擧げて名を末代に取れとの謎……今宵の吉兆でおぢやる。」

と十内は申しましたので一座興を催ふし、盃の獻酬は段々と重なり主客打寛ぎまして、元氣な彌兵衛老人ます／＼意氣昂り、内藏助が受けた盃を下に置きますのを見詰めて居りましたが、

「大夫殿、御自身から御約束を破らるゝかな……」



と笑ひながら申しました、彌兵衛が斯う申しましたは、嘗て内藏助が盃の中に五章の約束を定め、第一の箇條書に喧嘩口論堅く無用、第二は盃を下に置くべからず、第三はしたむべからず、第四は押へざる事、尤も相手によるべし、第五はすけ申間敷事、但し女は苦しからずと、下馬札の内に認めました盃を造つたことがございますからで、其の盃は内藏助の遺物として安場男爵家に、今も家寶となつて傳へられてある有名なものでございます、流石の内藏助も是れには一本參られました、

「アハ、是れは近頃の鹿相でおぢやつた……左様などはお忘れやるものぢやに、我が綱ふた繩で我が身を縛り申すとは、この事でおぢやらう……」

と機嫌よく飲み乾て彌兵衛に獻す、居合した人々もそれ／＼に今宵の集合所へ出懸けて往つた、其のあとでまた暫くは談笑の間に酒を酌み交しまして、常の酒宴と少しも變ることなく、夜の更けるまで平然として目前に迫る今宵の大事を知らざるもの、如

く、泰然自若と致し居つたと申すことでございますが、此の心懸があつて始めて大事を遂げ得られるので、膽の据ゑ處が違つて居ります、我々どものやうにオイ來た流で遣つた日にやア一度で打壞し、大失敗を仕出來します、失敗は成功の母なりとか申しますもの、此様ことの失敗は取つて返しの付くものでありません、主人も客も心置きなく枯木の春を迎へたやうに、胸中に滿々たる勇氣を抑へて盃を旋らすうち、夜は深々と闌に相成りまして、四邊も寂寥と致し人の往來も途絶える子の刻、只今の時間では十二時頃ほひと成りましたので、小野寺十内は盃を彌兵衛に返しまして、『最早時刻も移つて參つた、是れで納盃といたし、徐々にお支度あつては……』と内藏助の方へ膝を向けて申しますると、軽く首肯き内藏助は、『お心入れの馳走千萬辱う存じ申した、我等は一同への指圖もおぢやれば、一足お先へ參る……』



「堀部氏、いかい馳走に相成つた、それではお先へ御免下されい。」  
と十内も挨拶いたして、二人は堀部の浪宅を辭し、戸外に出るを彌兵衛も路次口まで送り出で、

「空にも心にも掛る雲なき明月道を照すは……」  
と申しますを、十内が引取りまして、

「是れぞ今宵の道しるべ、御同前に執着でおぢやる。」

と三人は微笑みて別れ、内藏助と十内の姿は臆て横丁に隠れて、本所林町は堀部安兵衛の宅へと赴きます、跡は月に吠る犬の聲のみが夜半の静さを破つて物凄く聞えま

した。  
彌兵衛老人は宵の口から同志の人々を饗應いたし、大分酒も飲んで居りますので、うつら／＼睡氣がさして参りました。

「あゝ睡うなつた、討入までにはまだ時刻がある、一寸と一睡して英氣を養はふ、時が來たら起きて呉れい……」

と云つて肱を曲て轉りとなつたかと思ふと、直ぐ鼾が雷のごとく起つて、前後も知らず夢中の人となりました、尋常大抵の人なら此様場合にグウ／＼寝られるものでありませんが、流石は名代の豪傑……彌兵衛の甥で堀部九十郎、佐藤條右衛門と申す二人がございます、當時は浪人いたし居りますが、今度の討入には蔭ながら盡力をした義人、今日も朝から伯父の家へ参つて何かと手傳つて居りましたが、稍や丑の刻とも相成りましたので、

「伯父上、最うお目覺なされて宜しうおぢやりまする。」

と軽く揺り起しますと、彌兵衛はウーンと伸びをいたし、  
「左様か、最う八ツ時に相成つたか、さらば打立たう……」



と日頃得意と致して居る長槍を突き立て、元氣よく立ち出やうとします時、婿の安兵衛と許嫁の今年十七になる娘の幸女が、靜に彌兵衛の袖を引きました。

「これ何を致す、未練であらうぞ。」

と彌兵衛は不興氣に見えますを、幸女にあつては少しも周章る様子なく、

「目出度今宵の御首途、決してお留め申す儀ではござりません、豫々お話に承りまするには、今宵のやうなお働きの時は、柄の短きお槍が御便利ではあるまいかと存じ付ましたので、差出がましろはございますが……」

と手を突き慇懃に申しますと、彌兵衛は忽ちの機嫌、

「オ、能うぞ氣が注いた、辱ないぞ……」

と云つて短刀を引抜きますと、ズバリ槍の柄を手頃に切つて捨てました、傍に居ました條右衛門が膝をボンと打つて、

「出来されたお幸どの、流石は伯父上のお娘御でおぢやる……それにしても鐙が無うては協ふまい、伯父上、拙者が……」

「オ、條右衛門頼む。」

と彌兵衛が申しますから、條右衛門は手早く鐙を付けて差出すを、二三度突馴らして置いてリウ／＼と扱き、然らばの一言を跡に残して本所相生町は最後の集合所へと、出で行く勇ましき七十六の老爺とはどうしても思はれません。

### 五八 寒夜 盥鉢で 熱燗

さて同盟の人々は、立鳥も水を濁すなといふことがございますから、赤穂の浪人は喰ふに困つて、捨撥になり吉良家へ浪藉に及んだと云はれてはならぬといふ注意もございしましたので、十四日の朝急に明日上方筋へ参るやうになりましたと、それ／＼店



賃を拂ひ、また買掛のある者は悉皆拂ひをいたしたり、知己の處へ暇乞に参つたり、或は荷物を片付などいたして、銘々に假住居を引き拂ひ、今夜は懇意先で一晩厄介に成るといふ口實で、日暮に風呂敷包を肩に掛け雪を踏んで出掛ける、中には兩國矢の倉の堀部彌兵衛の宅へ立寄り、首途の酒を酌むもございませぬ、又は知己の家へ参つて飲んだり食たり、或は寝轉んだりして時刻の來たるを待つ者もございませぬ。

義士の四十七人が、回向院前の餽餽屋久兵衛の家へ集つて、蕎麥切を喰べ酒を飲んで居りますと、主人が口癖のやうに「何のそのなんのその」と言て居りますを、大高源吾忠雄が聞き咎めまして、

「先刻から聞いて居れば、何のそのなんのそのと申して居るが、そりやア何のことである。」

と聞きますと、主人は頻りに頭を掻き、ひどく恐れ入つた體でございませぬが、揉手を

致しながら、

「實は何でございませぬ、へへ、何のそのといふ冠付の題が、俳諧の蓮座に出ましたので、何うしても出来ませぬから、ツヒ口癖のやうに何のそのなんのそのと申して居りましたのが、お耳障りになり恐れ入りました。」

「あゝ、左様か……俳諧の心掛があるとは面白い、亭主一寸筆をかせ……」  
と帳場硯を借りまして、鼻紙にさら／＼と一句を書き、

「何うぢや、是れでは點になるまいか。」  
と差出しましたを久兵衛おし戴き、

「なんのその巖をもとほす桑の弓……是は何うも有難う存じます。」  
と雀躍して喜んだと申すとは、講談師の得意として饒舌ります、大高源吾餽餽屋の作でございませぬが、講談ばかりでございませぬ、浪花節でも遣ります、復讐談を書いた



有名な本のうち赤穂記では、同盟の義士が餛飩屋久兵衛の店に寄つて、何のその巖をもとほす桑の弓、の句を竹林唯七が詠だと書いてあります、義人録では本所の或茶屋へ集合したとあつて、此の句を詠だものゝある事は載てゐますが、義士の一人某とございます、また一夕話には蕎麥屋が桶屋十兵衛となつて、俳句は大高子葉の詠だことになつて居ります、處で、寺坂吉右衛門の信行記を見ますると、斯様ことが書いてございます。

本所餛飩屋久兵衛へ集り候も虚説なり、上野介屋敷の近所と申し、左様卒爾なる事無之候、堀部彌兵衛殿は神崎の店へ参り支度の由、忠左衛門殿、澤右衛門殿、惣右衛門殿、其外六人、兩國橋向河岸龜田屋と申茶屋へ立寄り、そば切など申付緩々被二休息一候、八ツ時前に三ツ目堀部安兵衛どの宅へ被レ参、内藏助殿御父子など何も被レ致ニ装束一候。

寺坂吉右衛門の書た記録には、世間に種々の批難がございます、是等は確實な事實と信じられますから、義士の面々が一同餛飩屋または茶屋に寄合たと云ふことは、一切信用するとの出来ない説でございませう、さうすると何のその、俳句もグラ付て來て怪しくなりますが、大高源吾は俳諧を水間沾徳に學び、俳名を子葉と申しまして、上手の聞えあつた人でございますから、豪爽な句表から考へても、大高源吾の詠だものと思はれる、併しこの句を何處で詠んだかといふことになる、さア夫れはと言ねば成りませんが、餛飩屋久兵衛の店へ大勢集つた事は無いのが事實であるけれど、宵の口は三人五人と諸所で飲んだり喰たりしましたのだから、子葉も三四人と回向院前の餛飩屋で寒さ凌ぎに、餛飩で熱燭を引掛た事が無いとは断定を下すことは出来ません、それで快舉録などには大高子葉が五六人で餛飩屋久兵衛の店へ立寄つて、何のそのの句を吟じたと書いてございますから、自分も暫く其説に據つて置きます、序に一寸



云つておかねばならないのは、此の日大石内藏助が故主の奥方瑞泉院の許へお暇乞に参つたといふ事や、淺野土佐守の邸へ伺候したといふ南部坂雪の別れなど、盛んに呼物にして聴衆諸君を引附けて居ります事柄は、痕跡もない虚構で甚だしい嘘でございます、従來の講談は兎角斯ういふ虚説で固め上げて居りますから、事實を誤ることが最も多い、是れでは折角義士の講談を致し、又は武士道鼓吹なんてツて、豪さうな看板を振廻しまでも、唯だパンの材料にするまで、實説として傳へることが難かしい、赤穂義士實談の演者で漢學者である信夫恕軒さんも、赤穂義士傳に關する無根の十三ヶ條と云つて、左の十三項目を數へ舉げて居られます。

- (一) 大石の十八條申開きは無根なり
- (二) 南部坂雪の別は無根なり
- (三) 吉良の邸へ細作として、堀部彌兵衛の娘と間重次郎の妹が奥女中に忍んで居たことは無根なり
- (四) 大高源吾の煤竹賣は無根なり
- (五) 餽饈屋には集合せず
- (六) 寺坂吉右

衛門は出奔せず (七) 山鹿流の陣太鼓は嘘 (八) 土屋方の断りは無根 (九) 服部市郎右衛門は烏有也 (十) 仙臺邸の粥も無根 (十一) 赤埴源藏は大下戸にて汗粉黨なり (十二) 大石は素行の附人ならず (十三) 高田馬場の腰帶も無根なり

贅事はすて措きまして、義士の面々は約束を守つてそれ／＼第一の集合所本所林町の堀部安兵衛宅へ繰込んで参りました、寺坂吉右衛門信行は、吉田忠左衛門の命を受け、子息澤右衛門兼貞、原惣右衛門元辰、不破數右衛門正種と吉右衛門の五人が同宿いたして居りました、麴町六丁目大屋喜左衛門の裏店を出發後の始末を残りなく致し、自分の用事も達して、兩國矢の倉の堀部彌兵衛が住居に尋ねて來ましたは、最う八ツ時、只今の午前二時で彌兵衛も今出發したばかりでございます、戸締はしてあるが隙間漏る火影は、まだ宵の如く家内も何となく混雑して居る様子……吉右衛門は「堀部様! 堀部様!」



と一言聲をかけますと、老女の聲で、ハイと應答て出て参つたは彌兵衛の細君。

「何方でござります。」

「吉右衛門でおぢやります……堀部様には最う御出ましに相成りましたか。」

「ハイ、只今……」

と聞きまするや、吉右衛門におきましては、然らばと辭し去らうと致しますを、

「吉右衛門どの、先づお待ちやれ。」

と急に戸を開けられた、吉右衛門も後れたと心は焦慮て居りますが、まだ討入までに時刻はござります、彌兵衛老人に忘れ物などのあるので留られるので無いかと氣が注くと、流石に振切つて参ることも出来ません。

「何か御用のおぢやりまするか……」

と仁王立になつて待つて居りますを、老女は更に騒ぐ様子もなく、

「何れも様はそれく首途のお祝ひ遊ばされましたに、御身許り首途の祝ひに漏れられては、延喜が悪うござりませう、最う時刻にも間近いこと、悪留はいたしませぬから、さア一獻立土器を……」

と大きなものに満々と祝酒を盛つて差出されましたに、吉右衛門は微笑み、

「それは忝けなうおぢやります、然らば頂戴……」

と飲み乾せば、盃を下に置かさず、

「三獻はお式ださうにござります、御遠慮なう。」

「忝けなう頂戴いたします。」

と盃を重ね、立ながらの三杯に元氣彌増し、然らばと挨拶もそこそ本所林町へ駈附けますると、一同は支度を整へ、今や繰出さんとする處、吉右衛門はあたふた飛込みまして、



「各々様、吉右衛門奴只今到着いたいておぢやりまする。」

五九 衝天の鋭氣勃々

一日千秒の思ひで待ち焦れた、鐵石の如き同盟の士は丑の上刻から下刻、今の午前二時から三時の間に聚りましたは惣勢四十七人、人々は手に／＼携げて參つた風呂敷包を解いて、各々支度に取り掛りましたを觀てあれば、若殿原は多く糾紗綾の禪を締める、年を取つたるものは白紗綾の下帯を紐にて首に吊りまする、肌には白無垢黄無地、淺黄無垢の羽二重下着を思ひ／＼に着なし、上に縹子や縹珍或は緞子で包んだ衷甲を襲ねました、講談師が身には鎖帷子を着用いたしなど、張扇をビタ／＼敲き、算木をカチリ／＼と遣つて居ります、鎖帷子は此の衷甲の事でございます、其の上には紅桃色なんどの絹裏つけたる定紋附し黒の小袖を装ひ、鎖を包みし股引の上には截着を

穿きまして、帯をキリ、と締めたる上へ是れにも鎖を縫込んだ上帯をいたし、脛には脛當、足は陣草鞋、陣足袋を固め、兩襟兩袖に白布縫たる羽織をフハリと着なしたり、是れなん夜目にも直に敵と味方を見分くる便利の合符、まつた白布の一端は後ろへまはして、「淺野内匠頭家來何某」と、人々の姓名を記し付け、中には金の短冊に姓名を記して後へ下げた人もございました、斯く扮装たる上へ鎖入縮緬を扱きて手褌といたし、名香を薫らした兜頭巾を頭上に輕々と戴きます、この頭巾も多くは黒革包みでございまして、八幡座から白革の筋を入れ、好み／＼の鏝が着いて居ります、斯様に凛々しい立派な扮装は身分ある方々で、同じ物の具衣装の中にも、左まで立派で無かつた人もあるは、遺物を調べて見ても大方は推量が出来ます。

それから此の人々が帯した刀でございしますが、何れも立派な腰の物であつたことは、當時専ら噂に登り、其心掛を譽ぬものは無かつた、義士の内には十石二十石の軽い武



士や、五兩三人扶持の歩行横目などいふ人もございましたに、其の人々までが立派な腰の物を帯して居たといふのは、何うも事實で無いやうな氣も致しますが、是れには譯のあることで、淺野家四代目の殿様で、内匠頭のお祖父さんに當る長直といふ方は、世に聞えた刀劍好きであられたので、淺野家には名刀が澤山ございましたを、赤穂退散の時に臨み、内藏助は豫め今日あるを考へましたから、御遺物と稱して身分の軽い者までに、一口宛を分與へました、然ればこそ面々の腰の物が揃ひも揃ふた立派であつて、佩刀の利鈍にて持主を褒めもし又貶しもした、此の時代の武士氣質を満足させまするなど、深慮遠謀のあつたことも今更敬服されます、扱てこの差料の柄は銘銘平打の木綿糸で巻易へて巻切柄と致し、いくら激しく戦闘でも、手が滑るといふ事の無いやうにして有つたと申します、斯様風に豫て用意も致してある事でございますから、夫れ々支度も出来る、各々呼子の笛を襟にかけ、幾千かの金や氣付薬、また

は空腹になつた時の用心の餅を幾切づゝか懐中いたしまする、さア銘々の支度はこれで可しとなると、今度は討入の手配……、これもチャンと定めてありますから、先づ總勢を二つに分けまして、室内に躍り込んで働くもの、室外に在つて警護するものなどを定め、二ツに分つたうちを又二人或は四人を一組といたし、強敵に出會した時は互に助合つて味方を傷めない結構で……、さうして一隊を平假名の「い」の字から「さ」の字までを左文字に兜の圓き前立に刻み、又一隊は同じく「り」の字より「よ」の字までを前立に彫り、更に一組づゝを同じ文字、例へば「さ」の字が三人、「ろ」の字が三人、といふやうに致し、同じ文字の前立ある兜頭巾を戴く者を一組として、お互に助合ふ段取りに成つて居たのでございます。

いよゝ支度は十分に出来ました、部署は定まりました、待に待焦れた千歳の一遇、義の爲めに君恩に報いる時は今此時、宛かも悍馬泡を舍みつゝ手綱に抑へらるゝ如く、



手許緩めば忽ち眞驚、如何なる障礙あるとも一蹴し去らんとする勇ましさは、四邊を拂つて手に立つ物もなき光景でございました、時刻は次第に移つて来た、本庄林町の堀部安兵衛方は出發する、三ツ目横町の杉野十平次方も出懸けて、最後の集合點と極めた二ツ目相生町三丁目の神崎與五郎、前原伊助の家へ寄りました、其の扮装を見てあれば、兜頭巾に黒の火事装束、たゞ總大將が進めの號令を片唾を呑んで待ばかり、肅然として控へる状態は、驟雨來らんとして風先づ死し、寂々寥々たる中に殺氣満ちたる趣が見えまする。

やがて討入と極めました寅の上刻、今の午前四時となりました、討入時刻を丑溝の頃即ち午前二時といふ説でございますが、是れは四時が可いので……小野寺十内の手紙、原惣右衛門の手紙、寺坂吉右衛門の筆記等がなによりの證據となりませう、それに、夜明に敵を襲ふといふのは、夜討の定法でございますして、兵法に達した内藏助あ

り忠左衛門あり平時の夜襲に定法を守らぬこともありませうまいから、必らず味方に押寄せたと云ふのが眞當でございます、進めの號令が下りますと、神崎與五郎を案内といたして「淺野内匠頭家來口上書」と文函の上に墨黒々と認めましたを長竿の先へ結付けて、高々と差上げて進みます、續いて得物くを携へまする面々、規律正しく繰出しました、この口上書と申しますのは、

去年三月内匠頭儀、傳奏御馳走の儀に付、吉良上野介殿へ含二意越一罷在候處、於ちにおいてたうさしのびがたき事にて、及二刃傷一候、不辨二時節場所一働、不調法至極に付切腹被二仰付一城地赤穂被二召上一候儀、家來ども迄畏入奉存候、上使之御下知を受け、城地差上、家中早速離散仕候、右喧嘩の節御同席に御差留之御方有之、上野介殿討留不申候、内匠頭末期残念之心底家來共忍難仕合に御座候、對二高家御歴々一家來共挾二鬱憤一候段憚に奉存候得共、君父之讐不可二俱戴一天之難二黙止一今日上野



衝天の鋭氣勃々

介殿御宅へ推参仕候、偏に繼亡主之志趣一之志迄に御座候私共死後若御見分の御方御座候は、奉願二御披見一如是御座候以上。

元祿十五年十二月 日

淺野内匠頭長矩家來

さて此の夜夜襲に用ひました武器を調べて見ますと、

- |     |      |      |      |      |      |
|-----|------|------|------|------|------|
| 槍   | 十二筋、 | 長刀   | 二振、  | 野太刀  | 二振、  |
| 弓   | 四張二張 | 鉞    | 二挺、  | 大槌   | 六挺、  |
| 竹梯子 | 二挺大小 | 大鋸   | 二枚   | 玄能石鏡 | 二挺、  |
| 木槓杆 | 二挺、  | 鐵槓杆  | 二挺、  | 鐵槌   | 二挺、  |
| 鏡   | 六十本、 | 取鈎引細 | 十餘筋、 | 龜燈   | 一個、  |
| 小笛  | 數十個、 | 銅鑼   | 一個、  | 玉火松明 | 數十個、 |

でございまして、槍は九尺柄に切詰め、弓に半弓を加へてあるは、今宵の戦ひが室内戦でありますから其の用意、また大工道具は門や戸を打壊す爲め、鏡を用意いたしましては、邸内の所々に拔道が作つてあるといふ噂が専らございまして、怪しい處はピン／＼鏡附にして了解考へ、長細引附の取鈎は下から投掛けて長屋の屋根を乗り越える用意で、其の外もそれ／＼緻密の用意周到つて居つたは感服の外はございせん、また討入の時山鹿流の陣太鼓を打たといふことは、言傳へられて居りますが、是等はうその皮で張つた太鼓で、お練や芝居をするのちやあるまいし、吉良の邸内に乗込むまでは兵法に申す枚を含みて靜肅を旨とする場合でございまして、香氣さうにドーンドーンなどと太鼓を打つ筈が無い、銅鑼の用意は引揚に人數を纏める合圖に使ふ爲めでございましてらうと思はれます。

斯ういふやうに缺點なく用意が整つて出發しました、素より夜討のことで提灯一張、

衝天の鋭氣勃々



松明一本点けません、昨日の大雪は尙ほ往來を埋め、見波す限り白皚々といふ光景、それに曉の霜は降積む雪を凍らせ、有明の月は皎々として白雪に映じ、羞明ばかりにキラ／＼と照り輝きて晝に異らぬ明るさでございましたから、一同は勇みにいさみ、是れぞ全く冷光院殿（内匠頭戒名）の尊靈が冥助し給ふところならん、上野介如何に天に翔り地に潜りて匿るゝとも、白髪首討取つて泉下にまします亡君の尊靈に手向ずして止まんやと、血は沸き肉は躍つて意氣ます／＼昂り、氣は既に邸内に込入つて居る心を抑へ、肌膚を劈く寒威も何のその、霜雪を踏み占めつゝ肅々と進み、吉良の邸近く相成りますると、忽ち止れの下知が總大將から傳はり、一同四十餘人は敵の邸を睨み、ピタリと足を止めて整列いたしました。

六〇 東西二手に分つ

凛々しい四十餘人が火事装束で衝天の氣を呑み、整然と列びました状は、壯烈警ふるにもものなく頼母しくぞ見えたり、總大將たる大石内藏助良雄は、デロリ一同を視やる眼光炯々として月に輝き、思はずも人をして悚然たらしむる概ありでございました、やがて高からず低からざる落付いた壯重な口調で、

「方々、豫ての約束通り、此處最後の場と心得、存分に働かるゝが君恩の萬分の一に報ひ奉る御奉公でおぢやる、……萬が一にも上野殿を討漏すことがあれば、我々の武運も最早それまで……是非なき事と諦めて、一時に邸へ火を取掛け、未練なく腹搔切つて亡君に追付奉る所存でおぢやる、方々もその覺悟あれ！」

と判然言ひ切つて、南に向つて遙に泉岳寺の方を拜しました、四十有餘人の人々、誰か一議のあるべき、銘々に南の方を遙拜いたして、豫ての手配通り表門より打て入るものは内藏助を大將とし、裏門より打つて入るものは、吉田忠左衛門兼亮を大將とい



東西二手に分つ

たしまして、二十餘人づゝ左右にさつと分列いたしました。

東に面する表門より打つて入る東組の人々の部署を見まするに、正面から平押に突進する連名、

片岡源五衛門	高房	三六
武林唯七	隆重	三二
矢田五郎右衛門	助武	三二
吉田澤右衛門	兼貞	二八
小野寺幸右衛門	秀富	三九

富森助右衛門	正因	三三
奥田孫太夫	重盛	五六
勝田新左衛門	武堯	三二
岡島八十右衛門	常樹	三七

側面から前進するものは、

早水藤左衛門	滿堯	二九
矢頭右衛門	七教兼	一七

神崎與五郎	則休	三七
大高源吾	忠雄	一三

近松勘六行重三 三三歳

間十次郎光興 五二歳

表門内に屹立して司令部となるものは、

大石内蔵助良雄 四四歳

原惣右衛門元辰 五五歳

間久太夫正明 二六歳

東面の小さな新門を守つて、門外に遁げ出さんとする者を防ぐものは、

堀部彌兵衛	金丸	六七
横川勘平	宗利	三六

村松嘉兵衛	包秀	六六
貝賀彌左衛門	友信	三五

の四班に組立てられまして、第一班は玄關から突いて入る、第二班は側面即ち外部にあつて敵を室内に入れないやうに働きます役廻り、第三班は現代の軍隊の辭で申すと司令部で、表門を脊中にして指揮を致す役、また第四班に當ります五人は、東側の小屋七軒から飛出してまゐる者を押へるのでございまして、東組の人数は總勢二十三二人、

東西二手に分つ



東西二手に分つ

また西組の方は、西の方にある裏門より突きいる一隊でございまして、第一班で小  
玄關より闖入いたします一組は、

磯貝十郎左衛門正久 四二歳  
倉橋傳助武幸 三三歳  
赤垣源藏重賢 四三歳  
大石瀬左衛門信清 六二歳  
三村次郎左衛門包常 六三歳  
第二班は東組と同じく側面を警戒をいたす役廻りで、

堀部安兵衛武庸 三三歳  
杉野十平次房 七二歳  
菅谷半之丞政利 三四歳  
村松三太夫高直 六二歳  
寺坂吉右衛門信行 八三歳  
潮田又之丞高教 四三歳  
奥田貞右衛門行高 五三歳  
千馬三郎兵衛光忠 五五歳

茅野和助常成 六三歳  
木村岡右衛門貞行 五四歳  
前原伊助宗房 九三歳

間新六光風 三三歳  
不破數右衛門正種 三三歳

第三班は裏門を警戒いたしながら、南側に面する長屋より飛出す吉良の家臣を牽制し、西組の指揮に當るのでございます、其人々は、

吉田忠左衛門兼亮 六二歳  
間喜兵衛光延 六八歳

小野寺十内秀和 六十

以上二十四人!

東西二組に別れてヒタ押に表門裏門へと押掛けて参りましたが、當夜は大高源吾の偵察に違はず、吉良邸にては大友近江守などをお客といたし、風流お茶の湯の會を催ふして、折柄の雪に興を増し、夜の更るも知らでりました事ですから、邸の人々は

東西二手に分つ



上も下も別ちなく、晝間よりの疲れに草臥れ、グツスリ寝込んで丁ひました、斯う言つてしまへば、吉良家は如何にも迂闊極まるやうで、赤穂浪士が復讐の企てなどは少しも知らずに枕を高くして居たのかといふ疑ひも起りませうが、決して左様ではありません、浅野内匠頭が切腹し家断絶に及びましてから、復讐の噂はチラ／＼世間で致しますので、左なきだに臆病風の立つて居る上野介、深夜鼠がガタリと音をさせました、枕刀に手を掛けて寢褥の中で起直るほどでございます、既に上野介が左様でビク／＼致しますから、養子の左兵衛を始め家來の面々も、嚴重な警戒を怠りません、又上杉家からしても、附人が吉良の邸へ詰めて、万一の用心に寸時の油断なく、邸内は晝夜見知らぬ人の入來るや、ソレ復讐と風聲鶴唳にも、股立取つて佩刀に反打する程でございます、斯うまで用心を嚴重に致しても、猶安心が成りませんかして、上野介は多く麻布の上杉家邸内に潜み、赤穂浪士の舉動を探るに努め、上杉家にて亦た

油断なく探偵を放つて應援しましたが、内藏助が反間苦肉の計略は幾分は警戒を弛め、誰憚るところなく年忘れの茶會などを開き、風流がつた樂みに夜を更しましたも、運の盡きた處で、所謂人盛んにして天に勝ち、天定まつて人に勝つといふのも茲等の事を申すのでございませう。

全體この本庄松坂町二丁目の吉良の邸は、元松平登之助の屋敷でございましたを、元祿十四年三月二十三日上野介が御役御免と相成つて、吳服橋内の屋敷を召上げられて、此處へ屋敷替を仰せ付けられた處で、東に表門があつて西に裏門あり、坪數二千五百五十坪建家八百四十六坪餘である、四千二百石取の高家の屋敷としては廣いやうでございます、東に向つた表門のある方は、一帯に長屋で門の左右に長屋が七軒あつて、往來を隔てた向ふ側は、旗下牧野長門といふ人の邸でございました、又裏門のある西の方も、門の左右に長屋が是れも七軒、その向ふが町家を雁木のやうに縫ふて



同向院でございます、南の方も一帯の長屋で、此には二十八軒あつて、相生町の往來に臨んで居ります、北の方はと見まするに東寄に松平兵部大輔の家老本多孫太郎の邸、西に寄つた方は長屋が五軒あつて、塀を堺に旗本土屋主税の邸でございます、現在の松坂町二丁目五番地東側のところで……東西凡そ七十間、南北三十四間餘の邸を構へて居たのでございます、詳しい屋敷の建方や間取の模様は、説明いたすと唯諄々しく成りますから、別段に申しあげませんが、傳ふる所によれば、大給子爵家傳來のものが一番に委しいと云ふことであります。

同盟の勇士は何れも火事装束に身を固め、曉天の月光に煌く雪を踏みつゝ、堂々と表裏の兩門指して懸つて來ました、此處で一才斷つて置かねばならぬ事がある、それは討入については、皆火消役人の扮装をして、邸内に火事があるから開門せよと、口々に觸れこみましたが開けません、此表門は構造が堅牢で破壊することが出来なかつた

ので、手輕い建築であつた裏門を打ち破つたと傳へられて居りますが、是等ほとんど無い間違ひで、初めから裏門は打壊す計畫を立て居つたのでございます、又表門を壊すといふとは、斯様夜襲、殊に火事に假托て本望を達せんと圖つた程ですから、決してあるべき筈がありません、當時の掟を見まするに、武家屋敷で自火を出す場合、構へ内の建物が残らず焼けて了ひましても、表門さへ焼けずに居れば、火事は無かつた體裁に取繕ふことが出来、出火の責任を問はれずに済んだものでございます、斯ういふ慣例のあるので、討入當時も之を利用せんと結構で、手配り其の他お膳立がチャンと出来上つて居ります、討入の騒ぎをボヤの混雜のやうに見せ掛け、豫て復讐があらうと心に期して用心をしてゐる、吉良の家來どもに討入と思はせない手段に組立てられて居るのだから、表門を壊すといふことは無いのが實説、奇兵を用ゐて敵を斃す計略に出たこの復讐で、其様拙劣な策は取りません、さア是れからが愈々討入の大修羅



場、併し空板を敲いて口から出任せ、上頤と下頤の打附り次第にお饒舌をするのとは大分違つて居る。

六一 東組の大手より

四更の月は凄いほど冴え切つて、寒威凜冽曉風面を打つを物ともせず、表門に肉薄した東組の一手は、犇々と門前まで押寄せてまゐりますや、二挺の梯子を繼ぎ合され、グサリ掻き揚げて山と積まれました雪の上へ建てる、其の儘長屋の屋根へともたしかけながら、

「ソレ、乗り越せ！」

との號令の發するに、待ち設けた面々、何とて猶豫のあるべき、梯子の下にあつた大高源吾、御免と言つたのが早かつたか、足が梯子へ掛つたが早かつたか、猿猴の木に攀

登るに異ならず、一番乗は我なりと、勇み登れば之れに續いたは壯年血氣の小野寺幸右衛門、續いて吉田澤右衛門が梯子に足を掛ける折しも、雪の上に立てた梯子は大の勇士四人の重量で、一尺有餘雪中へ潜りこむ機會に打たれ、三人とも既に轉ろげ落ちんとしましたが、幸ひなるかな、跡より跡よりと續く一隊の身體に支へられ、足踏み外した者も、下より押上られましたので、轉げ落るものもございませんで、大高源吾は早くも屋上に飛び上つた、屋根の雪は猶脛を浚し、足を踏むごとに、グサリ〜といふ音が寂寞たる夜陰に響き、鬼氣襲ひ來たるの光景でございました、然れどそんな事にビク〜する面々でない、臥薪嘗膽の苦を忍びて今や素懷を達せんとする時節が到來いたし、上野介の白髪首引提げて亡君の尊靈に手向やうといふ場合、八十に近い堀部彌兵衛のごとき老人ですら、血氣壯んな若手に劣らじと鋭々聲をして梯子に登ります。



一隊を長屋の家根へ登らせた跡に、悠々と梯子に足を掛け、後を振り返りました大石内藏助、猶ほ一人我が跡に従ふものがございますので、此の期に及び遂巡するは何者ぞと鋭き眼に一瞥すると、當年六十二歳の間瀬久太夫正明で……四方に眼を配つて更に油断なき有様は、流石に老巧の注意、また格別の處が見えて居りました。

「ヤア間瀬氏！御登り召されい……」

と、内藏助は聲を掛けますを、久太夫は莞爾いたして、

「先づ大夫殿より……今宵の惣大将たる御身が當座の警護は、年取つたれども拙者、態々殿に残り申したのでおちやる。」

と云つて内藏助を梯子に押上げるやうにして、自分は其の屋上に達するのを見届けて猶豫なく、老軀を起し勢ひ込んで軽々と攀ち登りました、此のうち逸る若殿原は寸時も踟躕ひ居らるべき、門内に積雪あるこそ時にとつての幸ひなれと、ヒラリくと身

を躍らして庭内に飛び下りる機會、屋上の雪は打寄する波の岩に碎けて散る如く壯觀を極める中に、此の手の指揮役たる原惣右衛門は、家根の上に仁王立、少しの油断なく一隊の指揮を爲しながら、月明に乗じて邸内を展望しつゝ、一步一步と脛を没するばかりの積雪を踏占め、人々を勵まして居ります。

大高源吾は門際の扉を足溜りに下りる、年を取つても壯者に劣らぬ元氣の老人、堀部彌兵衛は槍を杖に滑る足下踏占めながら、源吾に續いて扉際より下りんといたしまする、ツルリ滑つたら忽ち素轉挫と落ちる危ふさ、源吾は見るより思はず聲を掛け、

「堀部氏、御遠慮は御無用！拙者の肩を足場に……」

と扉際に立つて肩に足を掛けさせ、抱き下しまする、彌兵衛は無事に下りて、

「片岡氏、いかい御厄介を掛け申した。」

「相身互でおちやるわ。」



と斯る中でも友誼に強く禮儀を重んずるに、何となく奥床しい心持がいたします。神崎與五郎と貝賀彌左衛門とは、屋の棟にあつて、内藏助、久太夫の上り終るを見るや、梯子を内庭に下さんと往來の方より引揚げまして、長屋の棟まで持揚げたところ、唯さへ足場の悪い屋根の上、お負けに尺餘も雪が積つて居るのですから、ツルリ神崎與五郎足踏み滑らすと、其まゝドドドドと雪諸共に轉げ墮る、あゝ神崎がと傍にゐた同志が助けんとしましたが、もう間に合いません、見事地上へ投げ落され、腰の骨をいやといふ程撲ちましたが、素より英雄でもあり、且つ氣の張り切てゐる時であるから、直ぐ飛び起きて元氣いよく熾んでございます、貝賀彌左衛門もこの餘波を喰つて、既に梯子と共に墜落せんと致しましたが、梯子が滑り落るとき雪を搔き寄せた上へザクリと立ち、自然に屋根より内庭へ掛りましたので、怪我もせず只一寸吃驚したのみで……其の儘駆け下ります、續いて残る人々も我後れじものと先を争ふて下

ります、原惣右衛門はこの混雑を制しつゝ、邸内の舉動に目を配りツヒ足下の注意が怠つたものか、ツルリ滑つたので踏占めやうとしましたが最う駄目、その儘ツルツルと止途なく、屋根より滑り落ちて手足に擦過傷をしました、けれども此様傷や少痛位位の事で驚くやうな人物ではない、直ぐ傍にゐる壯手が立寄つて扶け起さうとするを、

「イヤお構ひやるな……大丈夫でおぢやる……」

と平然として威容を繕ひ雪を拂ひますうちに、追々と此の手の二十三人皆恙なく下り、大手の木戸は唯一人抵抗もなく易々と乗越え、内庭は譯なく占領し了りました。然らば是れより豫定の行動に出ると、大石内藏助は一隊の點檢を致しますれば、行装を異にした三人の侍、天晴衆に優れし骨柄で股立高々と取り、悠然と背後に控へるを目早く認め、敵の窺ふにしては餘りに沈着過ぎた振舞、何者なるかと目を透して視



れば、這はそも如何に一味徒黨の爲めに力を添へる、一族の大石三平と他の二人は堀部彌兵衛の甥なる堀部九十郎、佐藤條右衛門でございます、内藏助、扱てはと三人の心を察しましたので、

『方々の御志千萬忝く存じ申すが、我れ亡君の讐を復するに、方々の御加勢を受けたとあつては、上へ對しても名分が立ち申さぬ……何卒この場限りお手出しだけは固くお控へ下されたい。』

と判然言ひ切りましたに、二人は顔を見合せてホツト息をつき、大石三平は、『は、あ御尤もの御言葉……拙者は今宵の御企てに感じ、及ばずながらと存じ申して、却つて御妨げをいたしておちやる。』

と云ふ語のまた終らざるに、堀部九十郎は肩を怒らしまして、

『我々とても餘りの御壯舉に感奮いたし、お跡を慕ふて一臂の御加勢をいたさんとぞ

じて……のう、佐藤氏……』

と言ひますと、伊藤條右衛門は首肯き、

『只今堀部氏の申されておちやる如く、餘りの立派なるお企ての羨ましく存じ、兩刀帶する身の果報に、切て御加勢を……』

と挨拶いたすを、内藏助は慰勸に、

『方々の御心入一段と忝うおちやるが、何卒此の場合の儀をお察し下されい。』

と理の當然なる言葉に、それでもとは押し言ひかね、三人は口を揃へまして、

『さらば、後刻再びお目に掛り申さう、慮外ながら御油断なく御本望を遂げさせられ

S……』

『後々までの御心遣ひ、執着におちやる。』

と内藏助が會釋いたすを聞き捨て、潜り門より門外へ出で去りましたが、其の儘立ち



去るやうな薄志弱行の人々でありませんから、三人は申し合せ、夜の明けて、同盟の義士が吉良家を引揚げるまで、邸の外を警戒いたして居つたといふことでございます。是等は實に四十七士の行爲に感奮して、其の蔭ながら素懐を達せしめんと盡した得難き眞誠の侍、若し是れが赤穂の藩士でございましたら、共に討入つて目覺しき働きをした事であらうと、一層奥床しい氣がいたします。

さア是れからがいよいよ大活動の序開きと成るので、劍戟相映じ腥風襲ひ來るの活劇、千歳にその名の朽すして懦夫も眠りを覺す、その光景は果して如何ならん。

### 六二 吉良邸内の狼狽

二十餘人の同勢が梯子を掛て家根へ登り、門内に下りるのでございますから、如何に靜かに致したとて物音のしない筈はありません、況して四邊森々とした午前四時と

いふ時刻、天井裏で鼠がガタリと遣つても、大抵の者なら目の覺める時分で、此の夜はお客があつて幾干夜を更して寝たと云つても、グツト寝込んだ寝入り端ではございませんから、表門の番人足輕森半左衛門は尋常ならざる物音、家根でツシンくと怪しい音がする、ドタくと家根から大きな物の落ちるけたま、い響がする、函番を抱寝の床も凍る曉天の寒さには、家根の雪が解けて落ちるにも不思議と、頭を擡げて耳敏てますれば、ますくと怪しきは多勢の人聲、こは容易ならぬ一大事と、はや先づ胸を躍らせながら、同僚の權十郎に聲をかけます、

「權十、何だか變な様子ぢやねえか。」

「おう、御門前でもないやうぢやなア、又お長屋の衆が喰ひ酔つての口論ぢやあるめえか……」

「いや、左様ぢやあるめえ、下番の八太夫を起して見せにやアはるめえ。」



と半左衛門は、起き出でまして、

「八太夫、八太夫……」

と呼起して置いて、戸の隙間より窺ひますると、火事装束に身を固めました大勢が、鞘を拂つて槍を小脇に搔込もあり、抜刀引提げて突出るもあり、事態容易ならされば、氣も轉倒するばかりに驚き狼狽へ、寢間へ取つて返すや、寢衣を着替へる間もなく、一刀擱んで、

「權十、一大事が起つた、猶豫する時でないぞ。」

と半左衛門は殊勝にも門番所より飛び出して奥へ注進せんと、東組の一手で今一班の人数が玄關へ推參せんとする前を横切りました、目早く原惣右衛門は、

「ソレ引捉へよ。」

と下知するや、半左衛門は一刀スラリと抜いて協はぬまでもと身構へました、第二班

にあるところの横川勘平、えいと一聲に唯だ一突き挫！と倒れて雪を血汐に染め成せる、今宵の血祭りに脆くも忠死を遂げました、續いて半左衛門に勵まされ、寢惚眼で飛び出した權十郎と下番の八太夫は、忽ち取つて押へられ、抵抗する勇氣もなく、高小手手に縛りあげられて目を白黒するばかり。

この時大石内藏助は、一聲下知を傳へまするや、一同哄然喊聲をあげ火事よくと騒ぎ立てると、西組もこれに應じてワツト聲をあげて、同じく火事よくと喚き叫びます、是に於て第一班に列する、片岡源吾右衛門、富森助右衛門、武林唯七、奥田孫太夫、矢田五郎右衛門、勝田新左衛門、吉田澤右衛門、岡島八十右衛門、小野寺幸右衛門の九人は、バラ／＼と表玄關へ掛ります、玄關の眞正面には早くも彼の竿の頭に括りつけて持參する處の一黨の宣言書、四十七人連名いたした「淺野内匠頭家來口上書」が立てられる、是は申すまでもなく公儀の役人檢視に来るとき、同盟の義士が夜襲の



素志本懐を明らかにせんとの用意に出たものでございます。

また第二班に屬しまする、早水藤左衛門、神崎與五郎、矢頭右衛門七、大高源吾、近松勘六、間十次郎六人の一手は、門内と奥庭との境の塀を打壊して、火事よくと口々に叫びつゝ邸内に躍り入りましたから、吉良の邸では赤穂の遺臣が復讐に討入つたとは、夢にも思ふものもなく、全く邸の内より火を失したものと心得て熟睡の夢を破り、寝耳に水の大騒ぎ、ガタ／＼と雨戸を開けて寝惚眼を擦るものもございする、遽かに騒ぎ立つ體に見えますので、大石内藏助は聲を勵まして、

「出會ものは誰れ彼れの用捨なく撃つて捨てよ、遁るものを追ふて無益の殺生するに及ばず、目指すは上野介殿一人なるぞ、組々は仲間を扶けあひ、手に立つ敵を斬拂ひ、時を移さず本望を遂げい、油断して不覺を取るな……」  
と下知すれば、指揮役たる原惣右衛門も右に廻り左に巡りて、

「三十人組は庭へ踏みこみ、手に立つものは、片ツ端より斬つて斃せ……、五十人組は長屋より出る者を用捨なく突き伏せい。」

と聲を嘎し、進め／＼と鋭く下知を致して、如何にも大勢の討入りたる如く見せかけ、その狼狽を利用して牽制せんと圖りまする、側面から敵を驅除せんとする第二の一手は、ます／＼火事よ／＼と絶叫して、邸内の人を驚かしつゝ、室外へ誘ひ出して搜索を便にし、易々怨敵たる上野介を討て首級を揚げんと、東西兩組が相呼應して盛んに煽り立てましたから、一層吉良邸の人々は周章ふためき、火事といふ聲を聞くや駕籠昇の兵左衛門や、馬屋の者吉右衛門が仲間部屋より飛んで出まして、  
「火事だ／＼と騒ぎあがつたつて、何處にも火の手が揚がつて居ねえや、笑かせあがらア、面白くもねえ……」

と馬屋者の吉右衛門はキヨロ／＼して居る、駕籠昇の兵左衛門も寝惚たやうな欠伸を



しながら、

「おゝ、寒い〜、火事も何もねえに此の仰山な騒ぎ方ア、受取れねえなア……」

と云つて、是れも茫然突立つて居りますと、火事だ〜お出會なさいと叫ぶ聲がする。

「吉右衛門、彼方だ……」

と云つて夢中で駈出す兵左衛門に、續いて吉右衛門もバタ〜と走り出し、丸の中に左文字で「ち」の字を印した三人組、大高源吾、近松勘六、間十次郎の一组に眞鷲、トンと衝突しましたから堪まりません、唯だエイと一聲にツバリ斬り付けられ、ワツト云ひさま尻餅搦いて撞と倒れました、年若でもあり逸り切つた間十次郎は、再び槍取直して突きするんと致しますを、

「間氏、左様な端た者を殺すも無益の殺生でおぢやる……其の儘捨て置かれい。」  
と大高源吾は制しますを、近松勘六も

「手向ひいたす程の者でもおぢやらぬ……さア参らう。」

と言ひますと、間十次郎も微笑みつゝ、四邊へ心を配りながら、火事だ〜お出會なされと連呼して行き過ぎます。

如何に寢坊の者でも斯う騒ぎ立てられては、眼が覺めずには居られません、お邸内に火事がある、それ起きよと、長屋住居をいたす面々は勢ひよく跳起き、寢衣姿の丸腰で戸外へ飛び出すもございませぬ、又はおツ取り刀で駈出すもございませぬが、殊に南寄の長屋は二十八軒もあつて、茲には上杉家からの附人も住み、事ある時に一廉の防禦に備へると、豫て探偵も届いて居ることで、東組には是等に備へる第四班、即ち遊撃隊の堀部彌兵衛、村松喜兵衛、岡野金右衛門、横川勘平、貝賀彌左衛門の五人が、眼を皿のやうに配つて、さア來い來たれとドキ〜光る太刀を引提げ、或は槍を横たへ出るものあれば、用捨なく討て取らん構への怖ろしきに、臆病未練のものは戸外



へ一旦飛び出しましたが、此の體に叱驚仰天、再び戸内に駈込む折柄に敵を脅退の矢幾筋、ヒュー〜と風を切つて飛び来るに膽を潰し、是りや何うぢや、火事場に征矢の飛んで来るは開闢以來ないこと、命あつての物種と内より確かり雨戸を押へても、怖いもの見度さの人心、そつと節穴から戸外を覗くと、生憎にヒュー〜と云ふ凄い音がして、パチリと上總戸射ぬいて立つ矢一筋、ワツと叫んで尻居に倒れる機會に障子バツタリ、倒れる物音にまた吃驚して目を眩す有様、まるで生きたる心地もなく、言甲斐なくもブル〜と慄へあがつて、雷鳴と間違へ桑原よ萬歳樂など唱へまするもあり、イヤハヤ是れでは吉良家の家來は、埒もない臆病武士ばかりで、殆んど手に立つものは無かつたやうでございますが、其様恥知らずの臆病武士ばかりの寄合でもない、中には随分目覺しき働きを咄嗟の間にいたし忠死を遂げて、天晴の武士と稱された人もあるが、其の地位が好くなかつたので、美名も後世に傳はらずして、空しく犬

死に終りましたのは、其の人々の爲めに今更氣の毒のやうな心地がいたしまする。

### 六三 贅口は御無用

さて此の夜弓を取つて敵の心膽を寒からしめたは、何人でございますませうか、斯様の室内戦に飛び道具を用ふるは、卑怯至極の振舞であるなど、種々の理窟を捏返した學者連も昔からありました、素より敵を矢食にかけて射縮めやうと云ふ如き、そんな卑怯極まる策戦計畫では無かつた、正々堂々と敵の邸内へ乗込んで、怨み重なる仇を報いんとするに過ぎないのであるが、味方は四十七人の外續く後援者は無い、敵には十五万石の大名上杉家の後援がある、殊に赤穂浪士の討入を氣遣つて之に備へるため、上杉家より多くの附人が入込んでゐるとの噂は専らあること、上杉家と吉良家の關係は切ても切れぬ親子の間柄で、吉良の當主左兵衛義周は實に上杉弾正大弼繼憲の

贅口は御無用



寶子で、隠居の上野介義央は綱憲の實父でありますから、それ討入といふ場合には上杉家より加勢の人数を繰出し、吉良父子を助けんとするは其の關係上有り得べきこととでございます、左様なつたら何うでせう、十五万石の大名を對手にせねば成らぬ事となるので、奇兵を以つて功を奏する手段に出づるこそ、一味徒黨の執るべき安全の策でございます、功を一舉に收めやうとするには、敵を牽制もしなければ成りません、又恐怖もさせねば成りません、周章狼狽の處にも乗せねばなりません、是等は夜襲に奇兵を放つての方法で、兵家の常に襲踏する處であつて、決して卑怯な手段でなく、又未練な行動でも無いのでございますから、弓矢を用ゐて敵を威嚇いたしたとて、是を批難するは迂遠な理窟で、取るに足らぬ議論、この一事で義士を褒貶しやうとするは、甚だ度量のない遣り方で、感服することはできません、何も今更屁理窟を立て青筋を張るまでもなく、既に古來より定論のあることとでございますから、其様ことは抜きに致

し、東組の一手でこの弓を射たものは誰れであつたかと申しますに、早水藤左衛門と神崎與五郎の兩人は、弓術にかけては天晴名譽の業者で、側面より敵を牽制して正面の玄關から討て入る同志に便宜を與ふる屈竟の役でございます。

一面には火事よくと騒ぎ立て、吉良の邸内にある人々に狼狽させ、吃驚くりして戸外へ駈けだすところへ、矢頭を量つてヒューと射出しました、素より敵を射殺すといふ意志ではありません、威嚇して荒膽挫き呉れんと結構で、殊に日頃から兵の射手と聞えたる早水藤左衛門、火事よくの叫びに誘はれて、あわて出る人影を透しみるより、弓に矢を番へて満月のごとく引搾つて居りますから、ヒューと切つて發てば弦音高く虚空に響き、矢鳴りはあたりに震ふて飛んで參ります、敵は思ひ設けぬ矢ひびきに驚き愕て、右往左往に逃げ迷ひ、唯だ夢に走るやうな氣が致して、火事にしては變だなど氣の注ぐ者はございまして、扱ては赤穂浪士の討入りと初めから



覺つて、主人大事と働かんとする儕輩はなく、譯もなく遁げ延びる光景の憐れに見え  
ました。

斯かる騒動に邸内は鼎の沸に異ならず、吉良家の六勇士としての一番に數へ擧げら  
れて居るは小林平八郎、續いて鳥居利右衛門、清水一覺、須藤與一右衛門、大須賀治  
部右衛門、左右田源八郎でございまして、殊に小林平八郎のごときは、只に芝居や講  
談または浪花節などで勇戦の狀が傳へられて、義士の討入といへば此の老武者を追想  
させますが、芝居や講談や浪花節ばかりでなく、江赤見聞記といふ義士の事蹟を比較  
的眞面目に書きました記録にさへ、

上野介家來小林平八、鎗をひつさげ勢ひを振ひて、所々に槍を合せ防ぎ候得共、あ  
またに打合候故、遂に討留る。

とあつて、如何にも大に奮戦して義士の人々を惱めたやうに見えますが、實際を調べ

てみると嘘の皮で、詰らぬ死にざまをして居りますから、芝居や講釋ほど力瘤の入れや  
うのない、極意氣地のない案山子武士の如く思はれますが、全體小林平八郎といふ  
人は、上杉家よりの附人には違ひありませんが……同じ附人でも此度の事件に就て特  
に上杉家から参つて居るのでなく、萬治元年十二月に上野介が上杉彈正大弼綱勝の妹  
富子を娶りました時から、富子の附人として吉良家へ仕へたもので、元祿十五年の討  
入より四十五年前に最う來て居たのでございます、それで年齢も赤穂記外傳などには  
四十三歳と麗々しく書いてありますが、是等は實に當にもならぬ茶羅ツぼらで、討入  
の時が四十三歳としますと、萬治元年に上杉家と吉良家と縁組の整つた折は、平八郎  
はまだ生れて居ない事に成りませう、假りに二十歳位で附人になつて來たとしますと、  
討入の當時は六十五六の老人でございます。

まゝ其様ことは何うでも好いとして、平八郎は火事よくと人々の騒ぐ聲に目を覺



しまして、扱ては邸内に火を失したと見えると、瓦破と跳起き、寝衣の儘で袴だけを  
着けながら耳を濟しますると、容易ならぬ物音がする、是れは中々に火事どころの騒ぎ  
では無いやうである、一大事が出来たにはあらざるかと、おツ取刀で南寄の長屋より飛  
び出しますと、邸内には早や東組の一手がヒタ／＼と込み入つて、表玄關では名乗  
をあげて闖入する聲が雷の如く、夜陰を破つて勇ましく聽える、體々たる内庭の雪に  
月は照添ふて晝間のごとく、劍戟の光きらめきまして物々しい扮装の幾人が、眼を配  
つて油斷のない光景が有り／＼と認められますから、這は主人の大事と成つてけりと  
魂魄も身に副はず、既や氣は呑まれて了りましたが、聊かでも恥を知るものなら此の  
場合流石に逃げもされません、是りや大變最早とても表玄關より入ることは難し、  
南書院の妻戸口より一刻も早く奥に入り、主人を落し參らせんものと、勝手知つたる  
事でございますから、樹の間堀際を縫ふやうにして、今や南書院の堀際に辿り附ふと

いたします時、平八郎の運命の盡くるところか、忽ち姿を見現され、

「待て！」

と一喝したる一手の二三人バラ／＼と追ひ継りまして、柄に手を掛ける間もあらせず、  
平八郎は哀れむべし、袴々と搦め捕れました、斯うなりては如何に氣は丈夫でも、手  
出しはならず、徒らに不覺を悔むの外はありませんが、搦め捕つた岡野金右衛門、横  
川勘平、貝賀彌左衛門等は、目に透し見れば六十有餘で人品骨柄賤しからず、吉良の  
家臣中でも名ある一人と見て取りましたから、

『上野介殿のお居間は何處でおぢやる、案内されい！』

と引立てんとすれど、動く氣色はなく、靜かに頭をあげ、

『自分は下々の者、主人の居間など存じ申さず……』

といつたまゝ、頭を垂れました、横川勘平この體を見るより、ハツタと睨みつけ、



「黙らつしやい、下々の者と言拔けんとして許しは置かれぬ、是の着物……」  
と平八郎の着用する絹の衣類を指されましたから、グツト言葉に詰つて再び言逃れる  
口實がございませんで黙つてゐる。

「上野介殿は御家來まで御有福でおぢやる、如何に御有福でもな、御目通りも叶はぬ  
下々の者が絹物を着ることは出来申すまじ……さア何うでおぢやる。」

と疊かけて詰られても、一言半句の挨拶もしない、耻を知る武士ではこの答へは出来  
ますまい、彼れは啞となつた、最う死は覺悟したものの如くであります、ヂツト睨み  
付けてゐました、岡野金右衛門は堪り兼ねましたか、

「横川氏、彼様の奴に贅口御無用！」

「いかにも……」

と答へると同時に扱く手槍の穂先、キラリ月に煌きました。

この事は大河原文書に、「小林平八郎小屋より出で御門半戸口へ参り候處被二搦捕、  
上野が居所案内せよと申候へども、平八儀下々にて存不申と申候らへば、下々が絹  
の衣類着るものかと、其儘首を討取り候由、首見え不申候」とございませす、大河  
原文書は米澤藩士大熊彌一右衛門が、討入の後本庄の吉良邸へ番に當てられ、其の見  
聞を元祿十五年十二月十八日附で、本國の大河原忠左衛門等を送つた書でございませ  
すから、小林平八郎の一條は、これに據て斯く斷案しましたのでございませす。

### 六四 闇中に閃く電光

遂て正面の玄關へ眞幕、突入いたしました片岡源五右衛門、富森助右衛門、武林唯  
七、奥田孫太夫、矢田五郎右衛門、勝田新左衛門、吉田澤右衛門、岡島八十右衛門、  
小野寺幸右衛門の九人は、口々に、

闇中に閃く電光



「浅野内匠頭の家來、上野介殿に主君の仇を報ぜんとして推参したり、尋常に出會つて勝負あれ、願ふは上野介殿のお首級なり、出會へ〜、勝負〜。」  
 と家鳴震動するばかりに叫びつゝ、戸を蹴破り打壊しまする音は、宛かも百雷の一時に落來る如く、其の物凄きことは、譬へんやうもないほど……當夜宿直いたして居た當主左兵衛の中小姓、齋藤清左衛門、同じく近習天野定之丞、同じく取次齋藤十郎兵衛は、何れも玄關近くに居りましたから、眞つ先きにこの音を聞きつけ、スワ大變、噂に違はず赤穂の瘦浪士ども押寄せたるとは推参なり、我れ〜此處にある上は、易く奥へ踏みこますべきと、第一番に枕元に置いたる一刀引提げ躍り出しましたは、中小姓の齋藤清左衛門、

「浪藉者！」

と大喝して玄關へ斬つて出る、此方の九人組は、猪口才なる支へ立て双向ふからは容

赦はならぬ、不愍ながら汝も主の道連、覺悟せよやと片岡源五右衛門渡り合、一打二打いたすうちに、

『片岡氏、斯様なものに支へられ暇取つては妨げ、……我等もお手傳ひ申す。』

と二三人鋒銃を揃へて打つてかかる、一人の敵ですら扱へかねて受太刀になる清左衛門、何條去年より鬱勃たる一氣を包み、腕に唸りを生ずる精銳の士二人三人向ふに廻しては堪まるべき、打ちこむ太刀の亂れた折柄、エイと大聲源五右衛門の斬つて下した鋭どい太刀先、外し損じて右の肩よりザクリ、清左衛門はあはれ血煙たつて控と倒れる。

是れと同時に玄關に續く板敷の廊下より、物をも言はず唐突に斬つて掛る一人がございしました、危く眼前へ閃めく刀の電光を、先に立ちました奥田孫太夫、ひらりと身を交はし一歩退りて身構へる、續く矢田五郎右衛門、勝田新左衛門も、敵幾人斬つて出



るか知れませんが、是れ等も開いて後背を壁にいたし油断なく、敵の舉動に注意を  
しましたが、續くものもないやうでございますので、刀を執つては堀部安兵衛と共に  
名のある奥田孫太夫が、闇を透かしてエイと斬付ける、敵も中々油断なく忽ちカチ  
リと受け止めながら、刀を引くや其の儘鋭どく打込んで参りますは殊勝な振舞、奥田  
孫太夫は靜かに同士に聲をかけ、

「各々方は此處にお構へなく……手間取つては大事の妨げ、何にこれしきの敵を斬つ  
て捨て、各々方に續きお供申すに何程の手間隙入らうや……」

と意氣昂りて勢ひ猛く斬り込まれ、敵は最早夕チく夕チく受太刀に扱ひ兼ねつゝ、  
猶ほ強情に奥へは入れじと必死の覺悟、狂氣のごとく薙立んとしますが、如何にせん  
對手は當時に名のある劍客奥田孫太夫でございます、到底も互角の勝負を爲すべき手  
腕でない、全然段違ひであるので、既に二三箇處に手傷を負ひながら、怯まず奮闘す

る勇氣は、流石に武士で、耻を知るところの致し方で、實に見上げた働らきでござい  
ます、五郎右衛門も新左衛門も隙を窺ひ、奥へ乗込まんといたしましたが、一人の敵  
の爲めに支へられるやうな鹽梅で、左右なく進みかねますると云ふは、討入にはそれ  
ぞれ約束があつて、互にその約束を固く守つて助けつ助けられつして、味方を損じな  
いやうに三人を一手のうちの一組としてある、孫太夫、五郎右衛門、新左衛門は表玄  
關へ乗り込みました九人、三組に分割してある一組で、左文字にて圓の中に假名で「に」  
の字を前立に戴く一團でございますから、孫太夫が如何にお構へなく奥へと言つたと  
て、其の儘御免と飛び込むのは約束に違ふから、

「奥田氏、御免！」

と一聲断りましたは勝田新左衛門で、九尺柄の槍を手繰ると見る間に、雲間を走る電  
光に異ならず、ピカ／＼としたと思ふうち、敵の脇腹へツブリ一本、只さへ傷手に我



慢するところ、是れでは最早力竭き、バツタリ倒れましては如何に氣は焦慮ても抵抗することが出来ません、齒齧みをいたして起き上らんとするを後目に向け、「に」組の三人は奥へと志して闖入いたしました、茲に必死の勇を振ひ兎に角も「に」組の三人を暫しでも支へた吉良方の勇士は、左兵衛の取次役なる齋藤十郎兵衛といふ立派な者でございます。

當夜非番であつて長屋に寝て居りました、左兵衛の近習役新貝彌十郎は、俄かに哄然あげた喊聲に夢を破り、頭をもたげ耳を濟ますと、火事よくと云ふ聲がけた、いしく聞える、扱ては出火、お表から火を失したのか、御隠居所から火が出たのかと、瓦破と跳起き、帯引き締めまするうち、表玄關の方に當つて、何事か罵しり狂ふるとき大聲が聞える、續いて戸障子にても壊すかと思ふ音が、寂寥した夜の静かさを縫ふて凄い響きを賜へ泌みるやうに傳へまする、彌十郎は思はず眉を擧めまして袴を

穿くもおそしと、股立高々と取つて一刀を掴むや戶外へ飛び出して見ますと、皎々と牙え切つた月夜の雪庭、點々と人影は黒く動いて右に左りにうろく、殊に驚ろきましたは銘々白刃を抜くか、鞘を拂ふた槍を突くかして居るのが、ありくと認められますから、這は一大事となつてけり、火事どころの騒ぎにあらずと、狼狽惑ひながら何處から御殿に入らうと茫然立佇みます折、表玄關は左兵衛の中小姓左右田源八、同じく料理方の小堀源五郎などが必死となつて、チャン／＼パチ／＼と、斬合ふ音の凄い響きが、チャリーンチャリーンと聞えだしたに、彌七郎は夢中で表玄關へ馳付けました。

此方の一手は十分手配りが届いて居りますから、長屋より飛び出すものを防ぐ第四班に屬する遊撃隊、手ぐすね引いて待掛ける網の中へ包まれたと同じことで、芝居ならヤア／＼と槍倉に進退谷まる處でございますが、實地の戦闘になると、中々そんな



優長な眞似はして居られませんが、ツブリー一本急所へ突き込まれましたら最後、どんな英雄豪傑でも、忽ち現世の名残り、葉末に溜る草の露、實にもろいもので、風に動き落つれば脆く砕けて消ゆるに異ならない、況して同等の手腕前があつても、仕懸るものと仕懸けられるものとは大した損徳がある、對等の勝負でも仕懸られるものが七分の損と云ふ程でございまして、斯様な不意打に出會ひましては、非凡な人間でない以上は慌てずに居られるものでない、新貝彌七郎の如きも先づ火事といふ叫び聲に驚き飛び出して見ると最う、斬結ぶ刃物の音に再度吃驚りして、夢中で玄關へ駆け附けるといふ狼狽たとき、氣がまるで轉倒して居りますから、只焦慮ばかりで、玄關目掛けて駆け抜くと致しするを、遊撃隊の一人が横合より槍にて太股へ一本お見舞しました、彌七郎はバツタリと雪の中へ轉びながらも氣が張つて居りましたから、其のまゝ勃然と起きあがるや、蹴引きつゝ玄關口へ滑りも駆け附けますを、年は取つても

打物執つては壯者も及ばぬ手練の老武者、一黨中の年頭七十六歳の老人とは思はれぬほど、槍を構へてヒタ／＼と走り寄り、エイと掛けたる氣合の一聲と「六、槍の穂先きは彌七郎の横腹へツブリと芋刺し、グツト刺つて引き抜く機會、聲も立て得ずバツタリ倒れて式臺へ片足かけた儘息が絶えました、之れを見て居ました原惣右衛門、」堀部氏、中々お見事でおぢやる……」  
と思はず聲を掛けますを、彌兵衛老人は、槍の穂先に滴たる血汐を振ひながら微笑み、「年寄に相應した對手……餘り手耐へもいたさぬのでな、藁人形を突くやうでおぢやるワ、うはハ、ハ、ハ、」  
と高笑ひをした、其の緯々として餘裕ある態度は、流石に手練のほど思はれて頼母しくぞ見えました。



### 六五 激戦して刀折る

表玄關より闖入いたした一手の一派「は」組の三人、吉田澤右衛門、岡島八十右衛門、小野寺幸右衛門の三十七歳を年頭にいたし、澤右衛門の二十八、幸右衛門の二十歳といふ年配で、思慮も分別もあつて、少壯客氣にのみ逸る青年でありませぬ、戦闘員としては頗る適當の年頃、殊に三人とも武術にかけては天晴の武夫でございますから、今しも奥田孫太夫、矢田五郎右衛門、勝田新左衛門の三人が、玄關へ斬つて出でたる吉良家の武士に渡り合ます際に乗じ、板敷の廊下に出ますれば、壁を小楯に取つて、寄らば斬つて捨んと身構る敵の姿を、茫然として有明の燈火に認めました岡島八十右衛門は、聲をかけ、

「壁際に敵あり！」

と同志に注意しましたので、敵も不意を打つて奇功を奏せんとした計策は破れ、最早適はぬと諦めましたから、今や拭板の廊下へ一步踏み出した小野寺幸右衛門を、唯だ一刀に眞二ツと勢ひ鋭く斬りつけました、幸右衛門は忽ちヒラリと身を替せて空を打たせる、敵は失錯たりと惘て、再び斬り込むを、カチリと受け止めたかと思ふ瞬間、エイと一喝したのが速いか、斬り込んだのが速かつたか、敵は高股ザクリと斬り落されて尻居に挫と轉がる機會、廣間の襖二枚バツタリ倒れましたは、左兵衛の小姓天野定之丞でございます。

是れ等の隙に澤右衛門と八十右衛門は、廣間へ踏みこんで居る、幸右衛門は後れたりと支へる敵を斬り捨てにして、其の儘奥へ走り入りますと、廣間の床の間には十數張の弓が立て掛けてございました、扱てこそと首肯、豫て同志の人々が、干辛萬苦を嘗めて探り出した吉良家の備への中に、萬一赤穂浪士の討入る事があつたら、矢倉にかけ



て射すくめる手段で、用心を厳しくいたし、宿直の者にも射手を選び、油断なく警戒しつゝありとの報告もございましたから、幸右衛門は弦の掛つた弓の十數張並べてあるに目を附けますと同時に、噂に違はぬ敵方の備へ斯くまで嚴重であつたか、今宵の狼狽は常に用意をなしながら、咄嗟の夜襲に手筈を誤つたものと覺えたり、君恩は泰山より重く一死は鴻毛より軽しと覺悟する我れ、同盟の士、縦ひ矢袋に掛けたりとて射すくめられて躊躇はせぬ、然りながら討て入る彼方より次矢早にヒューと射掛られては、如何なる豪傑も深傷淺傷に惱まざるゝは間のあたり、敵の狼狽て計略の手配り狂ひしも、天祐であらうと、心で喜びつゝ行き過ぎんとしましたが、又急の首肯いて引き返し床の間へツカくと進み寄り、片ツ端より張つてある弓弦をバラリバラリと切り拂へば、弦は唸りを生じて匆ね返り、弓は張りを絶れて轉覆し、急場の用に立ざるやうになし置き、悠々と奥へ進みまするは、流石の一黨參謀總長とも云ふ

べき樞機を握り、大石内蔵助と同居して今日の大望を劃策しました、小野寺十内の子息幸右衛門で、その注意は格別、萬一敵が味方を遣り過した後、豫ての手筈に心附き後方から、ドンと射立てられては堪つたものでありません、それで弓弦を斷た當意即妙の働きは、後々までも感ぜぬものはなく、小野寺十内が自分の妻の丹女に當夜の事情を委しく書面に認ため送りました手紙のうちにも、

——番人三人廣間で寝てゐたるが起きて立ちむかふ、一人を幸右衛門高股を切つて落し切ふせ直に奥へ入候、其床に弓立てならべあるを、幸右衛門奥へ切入りさまに、弓の弦をばらくと切はらひて通り申候よしにて、是は兼て敵のかたに弓はやり、射るもの多しと聞候ゆゑ、定めて内外より弓にてふせぎ申すべきまゝ、其心得すべしと各々内々言ひ合せたるゆゑに、敵何方よりか起出て、射掛らるべきと心付きて、弦を切放し通りたるならんと、よく心付きたるとて、輕き事ながら其砌人



ひとかん 感じ 申候——

とあるを見ても、親の血統をうけて、如何に用意周到であつたかを推定することが出来る。

表 玄關より乗り込みました攻撃隊の一手は、既に廣間まで驅破つて猶ほ奥へと突進いたします、斯うなつては戸障子を蹴破る音が激しく響く、奥向に仕へます侍女たちは勝手馴れたる邸内ながら、狼狽きつて逃路を失ひ、寢巻姿のだらしなく、彼方此方にうろく／＼と氣も心も轉倒いたして、斬結ぶ太刀の音に魂魄も身に副はず、偶々薄闇き室の此方から逃げ出さんとすれば、壁や襖障子を小楯にとり、闇も煌めく一刀振被つて、血走る眼に四邊を睨み、息を殺して窺ふ状の怖ろしく、敵か味方が黑白もわかぬに足は縮みて、ブル／＼と顫ひ戦のく身體の置きどころさへ無きに、不意に眼前へキラリと煌めく刀の光りを浴せ掛けられましたは、キヤツと魂消る悲鳴をあげ、

夢中で遁げ出すもあり。邸内は上を下へと揉みあひ、阿鼻叫喚、修羅の地獄といふものが、現世にあるならば、斯かる光景にやあらんと思はれます。

室内攻撃隊の一手で、「に」組の奥田孫太夫、勝田新左衛門、矢田五郎右衛門の三人は、玄關に續く拭板の廊下を踏み鳴らし、使者の間に戸障子を打壊して闖入しましたが、茲に手對ふ敵もございせんから、拭板の廊下を左に曲つて南書院の方へと踏み込んで参ります、孫太夫と新左衛門は眞幕に書院を目掛けて油断なく壁際へ傳へまして進む、矢田五郎右衛門は廊下を入つた右側の内玄關を警戒いたしましたので、前の二人より一步後れて、今や書院の次の間に入らうとする一刹那、傍らに身を隠して居た敵の一人、五郎右衛門を遣り過して置き、後背より不意打に眞ツ二つになれと斬付けました、此の時五郎右衛門幸に衷甲を着て居りましたので負傷もいたさず、

「おのれ卑怯者！」



と怒りの聲は鋭どく一喝を呉れると共に身體を捻るよと見るうち、横薙りに拂ひました、手練の太刀先避ける隙なく、敵は太股したゝかに斬り込まれ、アツと叫んで脚下にあります鐵の大火鉢の上に仆れ、進退の自由を失ふて、起き上ることも適はず、無意識に一刀を突出して、恰かも猶ほ抵抗する如く見えますので、五郎右衛門も小癩に障りましたか、

「まだ手向ひをるか……」

とハツタと睨みて打下す二の太刀に、斬りも斬つたりな、敵の胴腹を筒切りにいたした餘勢、鐵の火鉢をガチリと鋭く斬り付けましたから、鋒鋭下り五六寸の處より機會でポツキと折れる。五郎右衛門は苦笑をいたし、

「ハ、ア、折れをつては仕方がない……是れでは戦ひもなるまい、汝の腰の物は我等確かに借用いたす……」

と悠々と敵の刀を奪ひ取り、腰に残る鞘までを抜きて自分の鞘と差替へまして、

「用なき奴等の支へ立てに暇取つた……」

と獨り呟きながら書院の方へと急ぎ馳せ入りました、此の敵は當時何者であつたか、混亂の際で素より姓名の如きも知れませなんだが、後に至つて左兵衛の近習祐筆役を勤める、笠原長太郎といふ者であると知れました。

また此の刀の折れたことに就ては、他の同志と五郎右衛門が細川邸へお預けに成つて居りますうち、堀内傳右衛門にも話しましたとかで、同人の書留おきし覺書には、

——此度拙者申し候、刀は新身に候、定めて疵有之たるや、切先より五六寸下に折れ申候、物體其後は内藏助兼て申付、三人組合申候、廣間より書院へ通り申候廊下の隅に何者か居候て、三人の跡へ拙者通り申候、後背より切り懸け候らへ共、着込仕居候故、摺手も負不申候、其儘振返り切付け申候らへば、初



激しして刀折る

五四〇

太刀に倒れ、二の太刀を打候とき折れ申候。右の者の下に火鉢有之候處に倒れ申候。夫に打付候て折れたる物と存候。夫故相手の刀取候て指替申候。——とあります。他の諸書にも新刀の上に瑕にてもありしや、脆くも折れたので是非なく敵の差添を申し受け、取替たと申した事が書いてございますから、勇猛の状を形容した、出鱈目の見て来たやうな嘘で無いことが知れて居ります。

### 六六 蒔繪の薙刀

吉良の當主左兵衛義周は、まだ十九歳の青年で……火事よくと騒がしきに目を覺し頭をあげる時、玄關の方にあたつて尋常事ならぬ物音に驚きまして、互破と跳ね起きると同時に、隔ての唐紙惘だしく押開けました用人の須藤與一右衛門、

「御前、御目覺でおぢやりまするか、一大事……赤穂浪士が推参いたしてござります

る、……はやくお支度く。」

と下緒の手襷甲斐くしく、一刀提げて急立てる、その跡より續いて是れもおツ取り刀に、股立取りながら火急の場合、身分の輕きは御免なされと、馳付け参りましたは、宮石新兵衛といふ徒士でございます。

「火急の場合、此處は拙者如何にも支へ申さう、御用人にはお供いたいて片時も早くこの場をおん避け召されい。」

と左兵衛の寢間の次の間に一刀を上段に振被つて、進み來るものやあると、溜の間の方を一心に窺がつて居ります。此の左兵衛の寢間と申すは、次の間と溜の間を置いて縁側を越えますと、直ぐ南書院で……泊番でございました永松九郎兵衛、座敷當番の堀江勘兵衛などは殊勝にも斬つて出で、書院の方に當つては最う浪士の込入つたかして、カチリ／＼白刃を合す音、戸障子のバタリ／＼と倒れる響きが、手に取るやうに



聞えて来た。

「お表の方は危険い、御隠居所の方へ、いざお立退きを……」

と須藤與一右衛門が手を執らぬばかりに勧めます、此の時裏門の方にも哄然喊聲が聞え、上野介の住居、隠居所の方にも凄き物音の反響を傳へます、扱ては前後より押込んだものと見えたり、何れにしても一つに成り防禦せざれば不便と、早くも心を定めましたから、

「あれ、彼の物音では御隠居様も御心許なうおぢやります……御親子一つに成つて

鋭鋒をお避けなさるが急場の手段、……與一右衛門御案内申さん……」

と左兵衛を諫め促しつゝ、

「然らば宮石氏、この場合は……」

「畏まつた！」

と宮石新兵衛には油断なく、左兵衛を無事に立退さんと踏止まる、須藤與一右衛門は左兵衛の供をして隠居所の方へ避けんとなりましたが、最うこの時は血腥さい風が書院のあたりを吹いて居まして、玄關より突入した一手の勇士は組々に分れ、防ぐ吉良家の家臣は斬り立て薙ぎ立てられて傷を被るもございませ、又槍で突かれて倒れたまゝ起き上らないものもございませました。

「ろ」組の一手三人のうち片岡源五右衛門、富森助右衛門の兩人は、既に書院より右を廻つて溜の間へ出ますと、茲には宮石新兵衛頭張つて、奥へは一步も遣らじと斬つて出る、富森助右衛門はたゞ一打にと渡り合ひましたが、新兵衛も白徒、吉良家にあつて屈指の劍客と稱さるゝ男、芋や蕪人形を斬つて捨てるやうには参りません、打てば開き開けば打こんで来る一生懸命の働き、天晴腕に覚えのある武士で油断がない、殊に壁や建具を後の小櫃、不意の横槍を用心する注意を見て取りました片岡源五右衛門、



「味な支へ立するからは正しく當家の勇士と見えたり、一人の爲めに暇取つては妨げでおぢやる……打拂つて目指す敵の首級を一刻も早く擧ぐるがお互の望み……富森氏御免。」

と聲をかけながら、鋭どい太刀風唸りを生じて打て下す、宮石新兵衛も左右より豪敵を受けては、最早斬り死にと覺悟の體勇ましく、一步も退かず争ふうちに、重傷輕傷を幾ヶ所か受けて、身は忽ち唐紅、それさへあるに書院の方より追々と踏込み來る様子でございます、富森助右衛門は、勇氣いよく加はり、エイと高く叫んで打込む一刀、流石の宮石新兵衛も受け損じ、肩先深くバラリツン、血煙立つてバツタリ其處に斃れました。

この時遅く彼の時速く、片岡源五右衛門は奥を目指して突入しました、此の間こそ左兵衛の寢間の次の間で、須藤與一右衛門が今や左兵衛を警護して、奥の方へ遁れん

とする時でございますから、源五右衛門は飛鳥のごとく駈けこみ來ましたので、與一右衛門は茲ぞ主人の大事と一刀スラリ抜き放ち、

「瘦浪人の分才で高家の歴々を騒がすとは、無禮を知らざるか、狼籍者！」

と一喝して、唯だ一打に眞甲微塵になれよと、勢ひこんで打つて來るを、此方も手練の源五右衛門、ヒラリ身を交せて、

「なにを、此の期に及んでの囁言、覺悟いたせ！」

と斬つて掛るを受けつ流しつ、互に暫くは戦つて居りますうち、富森助右衛門が飛び込んで來ましたに、與一右衛門は源五右衛門一人ですら扱ひ兼てゐるところ、強敵二人までを相手の渡り合、その上左兵衛の身の上も氣遣はれますので、巧く引ツ外してと思ひますが、油斷をしたら自分は其の場で血煙りと葬られ、主人も同じ枕に殞れる恐れがございますから、彼れも中々老巧のもの、二人を誘引て庭前に出で、切て主人左



兵衛が此の場の危難を救はんものと、殊勝にも咄嗟の間に心を定め、ヂリリ／＼と後退りしつゝ縁際まで追詰られ、源五右衛門が打込んで来るを交さんとして、雨戸にドシリ身を持ち掛ける機会、雨戸の外れると共に内庭へ轉げ落しました、源五右衛門も透さずヒラリ飛び下りさま斬り付るを、與一右衛門は去る者でございませう、身を起しながらガチリと受け留め、勃然と起き上つて身構へる早業は、敵ながらも天晴の働らきに、助右衛門も續いてヒラリ、庭前の雪を蹴立て二三合打合しましたが、此方は血氣の兩人が鋭どい太刀先、到底も永く抵抗するは難いことで、與一右衛門は哀れ庭前の雪に鮮血を灌ぎかけ、主人の前途を見届け得ないで忠死を遂げました。

此の手の一人なる武林唯七は、南書院の縁側を迂回して、當主左兵衛の居間とは知らず、眞一文字に飛び込むや、徒士の剛の者宮石新兵衛は奮闘して瘡され、吉良家の六勇士と後に稱されし須藤與一右衛門は、今や内庭へ轉げ落ちた時で、左兵衛義周も流

石一人で其の場を避けるも心ならず思ひましたが、薙刀引提げ居間へ取つて返した出合頭でございました、唯七は此處まで進み入るにまだ手に立つほどの敵に出會さず、腕は唸つてモチ／＼する矢先、

「優しき若殿原よ、さア来い！」

と叫んで一打二打脅して逃げれば夫れまでと、打つかゝれば薙刀を打ち振つて向ふ殊勝さ、抵抗者ならば敵は選ばぬ唯七、二二合仕懸けてエイと激しく斬りこんだ一刀、薙刀を翳して危ふく受け留ましたが、鋒先餘つて額際を掠めたに、臆病風がゾット身に泌み渡りましたかして、殊勝な振舞何處へやら、奮闘する勇氣も挫けて、薙刀ガラリと投り出した儘に後ろを見せる卑怯の態度、唯七は

「卑怯者、返せ……」

と怒鳴りつゝ追撃に背後より一刀浴せかけましたが、今一寸小手が延びたらバラリズ



ンと斬つて退ける處を、ホンの擦り傷負はせたのみにて、敵は這々の體で逃げ延ると  
 き、身に數ヶ處の傷を負ひ、鮮血滴たるを物ともせず、勇氣凜々、勢ひ込んで飛び來  
 る血氣の壯者一人、己れ眞二ツと鋭どく斬つて下ろす危ふさ、唯七は人の足音に身を  
 開くのと、壯者の斬り込むの間一髪之差で、空を打たせましたから、壯者は焦慮つ  
 て二の太刀打ちこむを、唯七は得たりや應と一步退つてガチリと受け流し、直ぐ附入  
 れば開いて支へ、引けば打込む中々修練の腕、唯七さては敵中屈指の劍客と覺えたり、  
 斯る敵こそ手耐へあつて面白しと、十數合打合ひますうち、敵は速くも身を交しつゝ  
 一目散に逃げ去りました。然れど

『出會者は打つて捨てよ、逃るものは見逃せ。』

とは今宵の軍律でございますから、唯七も追撃をせず、無益の殺生するでもなしと、  
 手腕の唸るを耐へて猶ほ奥へと進み入りましたが、夜明に人々の室内を調べます時

曩に捨てた薙刀は黒塗に蒔繪があつて、金具に吉良家の定紋五七の桐を鏤めてあるか  
 らは、言すと知れた左兵衛、それと知つたら逃しはせざりしにと、武林唯七地團駄踏  
 んで悔しがつたと申すは、左もありさうなことでございます、夫れにまた此の時横合  
 より打つて掛り、左兵衛を無事に逃しましたのは、吉良の隠居上野介附の用人で、六  
 勇士の一人鳥居利右衛門が當主の安否を氣遣ひ來ましての働きでございます。

六七 氷碎くる水の音

凍れる雪を蹂躪き、曉天の月を浴びながら、千載一遇の今宵を内庭にあつて、敵を  
 驅馳いたす第二班の一手早水藤左衛門、神崎與五郎、矢頭右衛門七、大高源吾、近松  
 勘六、間十次郎の六人のうち、藤左衛門と與五郎は専ら弓を取つて長屋から、放心ヒ  
 ヲツコリ頭を出す處を、ヒヨウと射かけられ、吃驚りして首を縮めさする滑稽は、全



然吹矢のお化けで出たり引込だり、中には娑婆ツ氣を出して火事と心得、無腰で飛んで出る鼻の柱、ヒューと掠めてズブリ後へ矢の立つに膽を潰し、ワツト喚いて逃げ込むもあり、又出會頭に矢疵うけるもあり、側面から討つて入る同士にズブリと一突きされて尻餅つくもあれば、エイと斬り付けられ輕傷に氣も狂亂し、筋斗打つて逃げるもありまして、長屋の腰拔武士は息を殺して、逼塞する體でございませから、第四班の遊撃隊堀部彌兵衛、村松喜兵衛、岡野金右衛門、横川勘平、貝賀彌左衛門の五人が大手の北の方に寄りました小さな新門の邊りを固め、一つには敵の邸外へ逃げ出すを防ぎ、また一ツには長屋の押へに備へが十分立ちましたから、第二班に屬する面々もそれ／＼内庭へと込み入つて、將に表玄關より闖入したる九人と共に室内に躍り込んと勇氣勃々、宙を翔るごとくに内玄關に迫り寄りました。

吉良家隨一の剛の者として後世に其名を遺した山吉新八郎といふ武士がございま

す、この者は元祿三年四月左兵衛義周が、上杉家より養子に參つたとき附人として吉良家へ来た一人で、左兵衛の中小姓。最とも左兵衛の附人として米澤より來ましたは、山吉新八郎ばかりではありません、蓼沼平内といふものと二人でございましたが蓼沼平内は翌元祿四年の五月に死去して居りますから、左兵衛の附人として古くより吉良家へ參つて居ましたは新八郎であつて、討入の當夜も目覺しい働らきを致し、天晴の手腕前を表して居ります、極月十四日は非番でございましたから、山吉新八郎、多くは酒を嗜みませんが、何しろ前日の大雪で寒氣が甚だしい、一口やれるものなら何うしても、淡泊と湯豆腐か何かで一杯といふ日でございませ、新八郎も深くは嗜みませぬが寒さ凌ぎと晩酌に一陶を傾けて、明日は十五日の登城お供をして出ねばなりませぬから、この夜は早く眠りに就きましたので、義士の面々が乗り込み、ワツト喊聲を揚げ、火事よ／＼と庭内を駆け廻ります時は、其の聲に驚きて枕を擧げ、戶外の



様子を窺ひゐると、火事よ〜といふ叫びは此方彼方に起つて、互に相呼應するもの如くにも思はれますので、新八郎は眉を擧めつゝ勃然と跳ねおき、先づ戶外の模様を見た上と存じましたから、寝衣のまゝ小刀さへも提げませんで、長屋の戸をガラリと開け、雪の中へ何の用意もなく、ポカリと飛び出しますると、突然目前へピカリと煌めく槍の穂先!

「無禮者!」

と叫んで一步退り、身に寸鐵も携へませんが、身構へて向かうを透しますると、雪丸かせの蔭に火事装束したる者、槍を抜いて突き掛らんとする舉動の尋常ならぬ風體に是れはと先づ胸を躍らしながら、御殿の方に目を放つて火事は何處と見てあれど、火の手の擧がる處もなく、早や騷擾を極める邸内の光景、さては一大事の出來せるよ豫ての噂さに違はず赤穂の浪士が討入りたると覺えたり、今こゝで不覺を取つては役

にも立たぬ犬死同前と、新八郎は咄嗟の間に意を決しまして、ヂリ〜と後へ退れば同じ火事装束に身を固めました一人、また何れからか雪を蹴散らして現はれ出で、左右より槍をピタリと付けて突いて來るを、斯う仕懸られては、争つたら防ぐべき物なき無手の新八郎、到底も勝身がございませぬ、右からも左りからも突き出す槍を彼方に交し此方に避け、漸うにして戸口まで退きました、時こそビュ〜と風を切つて唸りを生ずる矢一筋、飛び來つて入口の柱へヅブリ射込みました、是れに新八郎もギョツといたし、敵には弓矢の準備整ひたるからは侮どり難き備へ立あり、御兩所に萬一の事ありては我々の不面目、これに上越すことは無いと、片手を後ろへまはして開けおきました雨戸に手を掛けるより速く、身を交して内へ飛びこみさま、ピリタ戸を閉め、ホット一息つきました。

屋内に入る新八郎は双物を選ぶ暇もなく、急ぎ手に觸れる脇指引つ提げ、再び戸口



に出で、窺へば、最う待懸ける者も居らぬ様子、占めた、この機會に一刻も早く御殿へ急がんと、帯キリ、と引き締めて窺つと雨戸を開け、戸外を透し見ますれば人の姿は失せて、太刀合はず音の物凄く遠く響きますので、氣は焦慮れども途中で支へられて御殿へ入ることが出来ねば詮なしと、四邊へ心を配りながら月蔭を忍びつゝ、勝手知つたる庭内でございますから、彼方へ抜け此方へ潜つて稍と竹塀の下まで参つたが、幸ひに見咎める者もないので、身軽く塀を乗り越えて、半戸口を外し内に飛び込みました、茲は南書院の庭續きで竹塀は書院前の塀で、今新八郎の飛び込んで来たのは、左兵衛の居間に續く庭でございます、此處まで来れば最う大丈夫、若殿は如何に在すか心許なしと、一散に居間の方へと庭傳ひ植木や泉水の間を縫ひ、脛を没する雪を踏みつけ蹴返して、ドン／＼駈けて参る。

この時東組の第二班、側面より討て入りました、『と組』と『ち組』の二手六人は、

既に内庭に込み入つて、今や第一班の表玄關から斬り込んだ同志と合體し、室内に闖入せんとする折で、左兵衛の居間續きの庭内にムラ／＼と込み入つて、中には縁側へ駈け上つたものもあり、『ち組』の一人近松勘六は、大高源吾、間十次郎に一步後れて、庭傳ひにドン／＼遣つて参りますと、築山の蔭から姿を表はして、植込の間を縫つて行く一人がございます、敵か味方かと月明りに透して見れば、着流しに小刀一本帶する外、手には得物も持つて居りません、如何にも急ぎで此處まで参つたものゝやうで……其の舉動が恐れを抱いて逃げ匿れる體とも思はれませんから、近松勘六も油断せず、吉良家には上杉家より多くの附人あつて、屈強の剛の者警戒を怠らぬとの取沙汰隠れなし、彼れの物腰格好尋常のものとも見受けられぬは、正しく附人の一人なるに疑ひある可からずと察しましたので、雪を蹴立て、バラ／＼と進み寄るを新八郎立ち留つて身構へなし、脇指の柄へ手をかけ寄らば一打ちと、ヂリ、／＼と進む眼光



炯々として寸隙の油断もありません、勘六も素より手腕に覚えある三十男、是れもチリ、くくと詰め寄りまして隙を窺ひ、眞甲よりエイと叫んで斬り込むを、ヒラリと身を交しながら横に拂つて来る早業に、勘六危なく太股を遣られんとする處、新八郎の得物は脇指にて刀身短かき爲めに、僅かに截着をかすりしばかりでございましたが、然れど勘六の勇氣はますく加はつて踏込みく斬り結ぶ、新八郎は奮闘して雌雄を決する心はない、氣に掛るは左兵衛の身の上、まつた隠居上野介の安否でございますから、此の場を斬り脱けて速く先づ左兵衛の居間へと心急ぐまゝ、兎角に多くは勘六の斬り込むを受けつ流しついたして、段々に一歩く御殿の方へ近寄らんと心掛けて、隙があつたら逃げ出さうと、夫れのみ氣を配つて居りますが、勘六は退るに従がつていよく猛烈に踏込みく、容赦なく浴せかけて参りますので、新八郎も逃れる隙は更になく、段々と泉水の渚まで来た、雪はまだ昨日ながらに積つて消えたところ無く、

凍れる上に霜をおきましたから、照りそふ月の影は映り、銀砂を蒔いたやうにキラキラと光り輝き、寒さは一層に皮膚を刺しますが、斬り結ぶ身はそんな事に頓着はありません、エイと打ち下せばエイを受け流し、斯うなつては新八郎も扱ふて脱れんとすることは難い、互に一上一下火花を散らして争つて居りますうち、勘六は敵の打ち込んで来るをヒラリと交して、泉水の渚の石に足ふみ占めますると、凍つて居ましたから堪まりません、ツルリ滑つてザブンとばかり水音高く池中へ落ちました、ハツと思つて這ひ上らんといたしますを、新八郎は覗きこむやうにして、一刀を頭上に加へた儘、宙を飛ぶ如く奥殿さして駆け附けます、勘六は幸ひに兜を戴きおましたので傷は受けず、泉水に落ちたとき手を突きて僅かの負傷をいたしたので……實に危ない處を逃れました。



六八 敵中唯一の英雄

奮闘突撃は素より目的でありませぬ、山吉新八郎は對手が泉水に滑べり落ちたので逃れる機会を得て、眞幕御殿の方へ駆けつけて参りますと、今縁側へ上らんと致して居りました矢頭右衛門七、斯くと見るより忽ち身を捻り、好き敵こそ御参なれと太刀風鋭く斬り付けます、え、又邪魔な奴が現はれたか面倒なり、斬り拂つて室内に上らんと新八郎は、二三合渡り合ひながら、月光で透し見ると、まだ弱冠の一青年で、……而も打込んで来る手練の腕前侮どり難きに、踏込みく斬り結びまするうち、右衛門七如何に心は矢竹に逸りましても、敵は吉良家に名ある剛の者、デリ、く追詰められて、退り凍れる雪に滑り、縁下のところへ尻餅つきて仆れる、哀れ新八郎の打ち下ろす一刀に、刀の錆と成らんとする危きところ、遙かにこの奮闘の體を見ま

した間十次郎、這は容易ならぬ敵の振舞かな、捨ておいては味方の名折れ、お、左様ぢやと槍を扱いて一散走り、雪を蹴ちらしつゝ駆け来るや、新八郎が片手上段に振被つて斬り下す危ふき間一髪を容るゝ隙もなき場合、

「間十次郎これに在り、いざ尋常に勝負あれ。」と大喝し、獅子奮迅の勇を鼓し、鋭どく槍にて突いて掛りました、流石の新八郎も名乗掛られてヒヨイと振向きますと、穂先は最うその身に近づきぬますから、危ふく身を交し、

「なにを……小癩な……」

前面の敵より横合の敵を防がんとする脇腹目がけて衝く、十次郎の槍に空をつかし切つて落さんとはしましたが、此方も年こそ若かれ、左失錯たりと新八郎が斬り下すころは、最う手許へ繰込みさま、ヤツと衝いた二の槍の早業、拂ふ間なくして太股のあたりをズブリ、この瞬間の争ひに矢頭右衛門七は危ふいところを逃れ、瓦破と起きあ



がりて身構へ直し、一刀を青眼につけて一打にと詰め寄ります。

山吉新八郎は一方には右衛門七の詰め寄るに油断なく、一方には十次郎に衝き立てられた太股の槍を確乎握つて、グイと引き脱きまして、血汐の流るゝを物ともせず大童になつて、

『青二歳に仕留めらるゝ山吉新八郎では無いワ、小癩な手向ひ立て覺悟せよ！』

と怒りの聲、破鐘のやうに四邊へ響き渡り、右衛門七、十次郎を對手に猛虎のごとく暴れまはる、其の奮戦勇闘には若手の兩人も扱ひかねて見えました。

近松勘六、間十次郎と『ち組』の一手でございます、大高源吾がこの夜の扮装見てあれば、裏も表も燃えたとばかり紅色の絹小袖を下着にいたし、白木綿の袖印つけたる両面黒の羽織を着、精巧の兜頭巾を戴きまして、薙刀かと思はれます刃廣の太刀引提げた武者振は、如何なる天魔鬼神も、之れには敵し難く見えました、源吾も玄關よ

り斬り込んだ一手と一團になつて、目指す上野介の白髪首得んと庭續きに踏み入りますと、壯手の右衛門七と十次郎の兩人、必死の戦ひ今や闌でございます、殊に敵は中々の曲者と見えて、血氣の兩人も危ふしと見て取りましたから、韋駄天の如く馳せ來たり、薙刀のやうな大太刀振被つて、横合よりエイと斬り付け、袈裟がけに肋までもと思ひきや、山吉新八郎飛び下つて僅かに鋭どき一刀避けた早業に、源吾は扱てこそと猛然たる勢ひを以て、隙もあらせす疊みかけた、みかけ斬り込んでまゐる、右衛門七、十次郎も剛勇の大高源吾が助勢を得ましたので、勇氣はますます加はり、左右に分れて奮然として躍り掛かります、新八郎いかに勇氣あり手腕は出來て居りまして、氣遣はれる主人の安否に心は焦慮つてゐる上、また新手の強敵が一人増して激しく仕懸けて參るので、進退谷まつて漸やく受太刀になりましたを、速くも見て取る源吾は一層猛烈に、眞向微塵になれと斬り付けて來るを、新八郎心得たりと受け流した



つもりでも、體を交す暇がございませんで、頭ばかりをちよいと横に曲げましたが、  
 冴えきつた手腕と刀の重量に受留めかね、横髪より口の際までスカリと斬り付けられ  
 たに、眼眩んでグラ／＼と仆れた儘起き上がることが出来ません、源吾は莞爾といたし、  
 『目指すは斯様敵にあらず、各々は捨置いて一時も早く奥へ……』  
 と罵まして共に縁側へ飛びあがり、奥の間さして進み行きました。

山吉新八郎は唯昏々として我れにもあらず、夢のごとくに霎時倒れて居りましたが、  
 やがて正氣がつかますと、頬から願にかけて滴たる血汐を左の手にて拭ひ、汚れた手を  
 積れる雪に塗りつけてヌツクと立ちあがり、キツト奥の方に目を注ぎますれば、逃げ  
 迷ふ女どもの泣き叫ぶ悲鳴が聞える、戸障子の壊れる音がバリ／＼グワラ／＼とする  
 かと思へば、バタ／＼ドタ／＼と倒れる響きの間隙よりは、双物で打ち合ふ凄い音が、  
 カチ／＼と手に取るやうに耳を買きますに胸を痛め、若殿左兵衛殿は如何にお在

らん、お居間に當つて彼のけたましい音のするは……お身の上のほど氣遣はしと思  
 ひますと、疲れし身體も勇氣が満ちて、蹂躪く雪の處々、血汐に染める慘狀に目もく  
 れず、縁側まで走り寄つて室内を窺へば、雨戸は蹴外されて庭前に散亂するもありま  
 す、打壞されて縁側に殘骸をとどむるもござりまして、見るも哀れな光景……思はず  
 齒切を爲し、

『え、遅かりしか残念！』  
 と獨り悔み歎き、急いで左兵衛の寢間へ飛び込みましたが、有明の行燈薄ぼんやりと  
 蟬脱殻、夜の具を照し、夜寒の風を防ぐ枕頭の金屏風、時の名匠が丹精を凝した風俗繪  
 に、炷物のかをり優しく匂ふばかりの美人すがたも、容赦なく土足に蹂躪されて、笑  
 ましげなる顔も玉の腕も踏潰され、へし折らるゝ亂暴狼藉、噫仕損じたり、若殿のお  
 行方は何處なるぞ、此の場にお姿の倒れ在さぬが切ても心丈夫と、ホツト人なき居



間に佇立みて溜息をつく折柄、さつと吹き入る夜明の風に血腥さき香を送りますので、新八郎またも心にかゝる左兵衛の行方、大膽にも有明の行燈提げて次の間を見ますると、斬り倒されたるもの二人三人、四邊の狼藉なる状を見ましても、奮闘激戦の跡は知れ、血は滾々として壘を潤すと云ふ始末でございませうから、左兵衛殿の前途いよいよ心許なく成つてまゐり、提げたる行燈下におくや奥に進みましたが、再び取つて返し行燈の燈火をフツト吹き消し、其のまゝ勝手知つたる奥の座敷へと主君を慕ひ進み行くは、天晴吉良家の忠臣でございませう。

豪氣の新八郎は左兵衛の居間を跡に二間三間、障子襖の倒れる中を勝手知つたることゝて、壁に副ふて奥の方へと進んでまゐりますと、雨戸は既に打壊されて開き放したる縁側に黒き人影、猶ほ奥を指して、スタ／＼と進むと認めましたから、足音偷みて近々と寄り後背より唯だ一打ちと、エイと叫んで斬り付けましたが、忽ち體を沈め

てガツチリ受け留めたは、當時の劍客堀内源太左衛門正春先生の門下に其人ありと聞え、堀部安兵衛と並び立つ奥田孫太夫でございませうから、容易に不覺を取るやうなことは無い、膝を突いたまゝ矢聲と共に横に拂つて来る早業は、中々息を繼ぐ間もない程に早かつたが、新八郎とて數ヶ所の手傷に疲れて居るものゝ、さう脆くは斬られて了ひません、さつと開いて巧みに鋒銃を避けた、孫太夫は稀代の名手、殊に勇氣の充満して、炎々たる猛火のごとき今宵、何條猶豫のあるべき、壘み込んで激しく打ちこんで来るに、流石の新八郎もデリ、／＼と後退りして受け太刀となつた時も時、うろ／＼と此處へ逃り來ました勝田新左衛門、横さまに一刀不意を喰はし、夕デ／＼と成るところを、二の太刀に右の肩よりバラリ、ズドンと斃れて、其儘起き上がることが出来ません、忠臣藏の狂言や講談、または浪花節の討入の場で、大活動をいたしまする小林平八といふは、此の山吉新八郎の目覺しき働らき振りをお袈裟に吹聴したのでござい



西組裏門を破る

ます、最も小林平八郎といふ人物はあつたに違ひない、又上杉家よりの附人にも違ひはありませんが、最う六十有餘歳の老人でもあり、討入の夜は飛び出すと直ぐ遣られて、何の働らきも致さず、お負けに首をチョン切られて了つて居るのでございます、夫れに此の人は不思議に豪かつたやうに傳へられて、全く吉良家隨一の剛の者である山吉新八郎の名を知る人の稀なるは實に遺憾な譯……人間の幸不幸と申すことは何にても付て廻るもので、獨り山吉新八郎その人へのみ限つたことでございますから、以て瞑すべしだ……

六九 西組裏門を破る

東組の格闘は今や大分闌と相成り、奥深く入り込み血腥き風は邸内に吹きまくり、慘澹たる光景を現はして一時前までの温かき夢は、掌裏をかへす修羅の場阿鼻叫喚の

聲と變りましたが、西組は如何なる活動を開始したたてございませうか、是れより西組に移つて東西呼應して討入つた策戦計劃を明らかに述べやうと思ひます。

東組は總員を四手に分つてございませうが、西組は之れを三手に分けて、第一班の磯貝十郎左衛門、堀部安兵衛、倉橋傳助、杉野十平次、赤埴源藏、菅谷半之丞、大石瀨左衛門、村松三太夫、三村次郎左衛門、寺坂吉右衛門の十人は、小玄關より仕懸けて闖入する手配り、第二班に屬しますものは東組は六人であるのに西組では、大石主税、潮田又之丞、中村勘助、奥田貞右衛門、間瀬孫九郎、千馬三郎兵衛、茅野和助、木村岡右衛門、不破數右衛門、前原伊助の十一人、殆んど倍數の人と成つて居りますが、是れ側面の警戒場所が廣いからで、裏門より右手の長屋七軒と、折曲つて南に建並ぶ二十八軒の長屋を牽制する結果でございませう、又第三班は西組の司令部で、この手の大將吉田忠左衛門續いて小野寺十内、間喜兵衛の三人にいたしまして、裏門つゞき

西組裏門を破る



に北へ折曲つた五軒の長屋を監視する人員の配置で……遊撃隊をおきませんから、三手に部署を定めて、堂々と裏門へ繰込んで来たのでございます。

西組の裏門へ肉薄するまでは途中に、辻番所が一ヶ處ございます、今堂々と敵の邸へ大ビラに仕懸ける一黨が、一ヶ處位の辻番所は恐るゝに足らない、何うで辻番か何かで火鉢を抱へて居睡りする老爺ども、生た老爺の拾どころとさへ云ふ程のもの、現代の交番とは大分趣が變つて居ります、併しながら幾干恐れるに足りないと申しましても、ワイ／＼騒ぎ散らされたり、役人どもに報告いたしたり、或は上杉家へ注進注進と出懸けられては、甚だ以て面倒でございますから、若し辻番所で彼れ是れしたら、引縛つて了へと手筈がチャンと極つて、二十餘人の同勢憚る處なく、勇み進んで番所の前を通り抜けんといたします、此の辻番は吉良家が自衛の爲めに設けたもので、裏門と並びました南の角にあつて、屈竟な足輕を詰めさせ用心を嚴重にいたし、怠り

なく警戒を續けて、辻番から異變のあつた場合は、嗚鳴ると直ぐ長屋へ通じる、長屋の者からは時を移さず役向に報じる事の出来る、所謂吉良家の見張所でございますから、坐睡りして居た足輕二人二十餘人の足音に寢惚眼を擦つて、ヒョイと外を見ますと、驚いたは何れも大袈裟の扮装でございますから、棒おツ取つてバラ／＼と馳せ出して來ました、此方では素より期して居ますこと、ソレと誰れが指揮するまでもなく、壯者連中がツ、ト進み寄りますを、

『何方でおぢやります。』

と番人の棒突き立て、支へんとするを、忽ち取つて押へるや、直ぐ高手小手に縛めた、足輕はいよく吃驚して呆れ返るを、鼻ツ先へドキ／＼する白刃を突き出し、

『聲を立て居つたら、是れこれを……』

と脅迫されましては意氣地なく、顔色も土の如くになつて、ブル／＼慄へて居る奴を、



「え、歩め！」

と牽引き立て門前まで牽かれました。

裏門に達しまするや、ヒタ／＼と詰め寄つて口々に火事だ／＼と叫び、

「御開門……御開門！」

と頻りに呼び立てますので、裏門の當番で足輕小頭の大河内六郎左衛門といふもの、  
惘て、起き出で四邊キヨロ／＼見廻しましたが、お邸内より出火した様子は更にない、  
又近くに火事のある體とも見受けませんから、變だなといふ感じが起ると、門外で火  
事よ／＼と騒ぎつゝ開門を呼ぶは何者であらうか、一人や二人の人数でもない様子は  
合點の行かぬことだと、門の間より透して見ると、こはそも如何に厳しく火事装束をし  
た廿餘人が、肅然として控へて居たに、火消役人とは思ひましたが、夜中猥りに開門  
は出来ません、六郎左衛門は猶ほ火事も無いのにと不審に堪へないで、再び邸内を見

廻して居りました。

搦め手へ詰め寄せた面々は、火事だと叫び開門と喚きましても、邸内は寂寞閑とい  
たして、門番所でガタリ／＼と音した位でございませうから、便々と何時までも待つて  
居られたものでない、血氣に逸る壯者は、幾度か打壊しに掛らんとしましたが、吉田  
忠左衛門は泰然自若として少しも騒ぎません、間喜兵衛老人膝行出で、

「小野寺氏、最早約束通りに。」

「左様、大手の人々も大方乗越えの手段附たでおぢやらう。」

と小野寺十内は吉田忠左衛門の方を見返りますると、忠左衛門は忽ち嚴かに下知を發  
して、

「ソレ掛れ！」

と言葉のまだ唇を出来らぬうちに、手ぐすね引いて待ち構へました三村次郎左衛門、



脊力衆に勝れたは此様時の一番掛けと、大木槌の柄に手が觸るゝや、恰も小槌を扱ふに異ならず、十分に振被つては力任せ、扉の眞中をドシン／＼と打ち下します、堅牢な太い門に支へられて居る扉、こゝとて中々ヤワな構造方ではなく、大木槌で二度三度殴りつけたつてピクともする様な物ではありません、大力の勇士が精神凝らしまして、何の此の位な門……打壊さいで置かんや、樊噲は鴻門の會に鐵の門を破り、女伊達等にすら門破りに名を遺した板額あるに、何ぞ破れざるこのあらん、如何に堅固に構へたればとて見よや人々、三村次郎左衛門の力の程を……と軽々大木槌を打ち振りまして、猛烈に打つて下しまするとツシリ、ミシ／＼ミシといふ凄い音がして、扉の横木はポツキと折れ、一寸幾分がある扉の板は三尺四方も朽木の如くポロ／＼に成つて摧かれ、門も長屋も一度に顛覆るかと思はれるやうな怖ろしき震動で、壁はバラバラと落ちる、羽目はフ／＼と釘離れがする、ソレ門は破れかけたり打壊せと、

鉞振翳して杉野十平次は門のあたりを發止と斬り付けます、次郎左衛門も猶ほ勇氣を籠めて、エイヤ／＼と門目掛けてまた二打三打、さすが堅固に造られました吉良家の裏門も、グワラガラ／＼とツと怖ろしい物音と共に、一枚の扉は巖丈なる釘もぬけ四五間も飛んでバツタリ倒れる、ソレ門は開いたぞと潮のごとく我れ先にと一齊に邸内へ飛び込みます、また滅茶／＼に破壊されました一枚の扉は、上の方ばかり撚り取つたやうに僅かに残り、下は殆んど粉微塵に摧かれてしまひました、此の時迄門番所の傍で呆氣に取られ茫然としてゐた、當夜の門番大河内六郎左衛門は急に正氣付いたやうに周章まはり、年に五兩のお足輕でも、田樂豆腐と同じやうに、二本さす身分、丸腰の儘ではと門番所に這ひ込んで一刀腰に打込み、門外へ逃げもせず奥殿へ駈付けんとする志は殊勝でございます、この時またも一黨は聲々に火事でおぢやる、お出會召されと呼はり／＼いたし、一手、二手、三手と手配り通りに別れ、大石主税



等の一手は、長屋のものや出ると待ちたる處へ、大河内六郎左衛門が臺所の方より入る積りか、バラバラと突切りましたを、手近に居ました下破數右衛門、エツと抜打ちに門番の六郎左衛門はドタリと倒れ、ウーンと参りました。

火事だくと聞いて飛び出した彌次馬は、吉良家の前に住つてゐまして、永年鼓眞になり、出入を致すところの仕立屋長右衛門、性來が些とあわて者と見えまして、火事といふ聲を聞くと火主を確める心もなく、お邸が騒がしいからと、火事仕度にな身を固め、鳶口肩に威勢よく戸外へ飛び出すと眞蔭、裏門の打破られてあるも夢中で、火元は何處だくと一言ひながら鳶口振廻して、一黨の中へ割込んで来たは、正しく抵抗するものと見えると、裏門を監視いたします間喜兵衛、エイの一聲に脆くも仕立屋の亭主は斬り斃され、ウワーツと云つたを此の世の名残に、意外傍杖を喰つて詰らぬ最期を遂げたものでございます、西組の第一番に血祭になつたは、門番の六郎左衛門、

當人の疵に就ては浅手としてあるが多いが、中々浅手ではありません、討入から十日目に主人の死に殉じて居ります、夫れから第二番に遣られたのが彌次馬で最も割を喰された仕立屋の長さんでございます。

### 七〇 逃るが三十六計

寢入端とは違ふた夜明に近い寅の刻、現今の午前四時でございますから、餘程の寢坊でない限りは、火事よくと騒ぎ立る聲に、夢を破つて飛び起きませう、それに唯だ火事だと喚き叫ぶばかりではありません、大袈裟に裏門を破壊しての狼藉、先づ火事といふ聲に吃驚して寢惚眼を擦るとき、ドタリガタ／＼の大騒動を知らずに居やう筈のないことで、吉良の邸を取圍んで居る長屋の家來ども、吃驚仰天して、先づ一度は戸外へ飛び出しました、その中にも食祿百石を受けて、年齢も四十と云へば分別盛り



の家老、松原多仲は裏門脇の長屋に住つて居りましたから、討入の騒ぎも他の人々より幾干か早く知り、火事よくと呶鳴散らされて先づ驚き、寢床を勃然と起きるや枕元に置いてあつた袴だけは急いで穿き、紐を締めながら一刀の下緒を口に咬へて、アタフタ戶外へ出んとする時しも、ア、ラ怪しや裏門の方の中つて、凄しき物音がいたし、障子にビリ／＼と震動を與へましたので、扱は火事と地震が一時に來たのかと、ますます慌てゝ夢のやうに戶外へ飛んで出るまでは、赤穂の遺臣が復讐の討入とは氣が注きません、多仲は戶外へ出てキヨロ／＼、火元は何處であらうかと、狐にでも魅まれたやうに、一刀は猶ほ下緒を口に咬へたまゝで、股立高く取つて生臍を表し、甲斐甲斐しく突立ちます、この時裏門は既に破壊され、三手に分れた二十餘人の西組はヒタヒタと押入り、南側の長屋を押へる大石主税等十一人の面々は、勢ひこんで乗り込み、凍れる雪を蹴散らしてバラバラと進み寄りませ體に松原多仲はます／＼驚きあわ

て、這は一大事である、御隠居の御身の上こそ危ふけれ。いざとばかりに駈け抜けて御殿に達せんと殊勝にも、身構へいたして逸散に數寄屋の方へ到らんとする折、ヒユヒユと風を切つて飛んで來た矢一筋、ヅブリ太股に立つ、アツト叫んで多仲は前へ膝を突いて仆れた儘で、射込まれた矢を引き抜かうと矢柄へ手を掛け、下を向いて居ます處へ飛び込んで參つたのは、茅野和助で……木槌を振被つてエイヤと腦天から御見舞申されましたから、堪まつたものではありません、多仲はギヤフンと參つて雪の中へ體を埋め、息の根が止つてしまひました。

これを手始めに南側の長屋に住つて居ります、徒士の者で富田五左衛門は寢耳に水の火事騒ぎに吃驚いたし、寢衣のまゝで戶外へ飛んで出る、お隣の星八右衛門も同じく惘てくさつて走り出ましたから、

「火事は何處でおぢやらうな……」